

最凶の組のIS操縦士  
～家族の絆で空を行く  
～

木原@ウイング

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界で2番目にISを動かしてしまった男、「真木 雷光」

彼は普通の男ではなく、実はとんでもない正体が有った……

それは……日本で最凶最悪の極道の【真木組】の会長だった!!

「とりあえず、俺の所の奴に手を出したら許さねえから」

過保護すぎるヤクザの会長が見守るIS学園の生活、一体どうなるの!?

# 目次

う

2番目はまさかの○○!? | 1

自己紹介は腹から声を出せ | 23

喧嘩は相手を見てから売れ | 44

密会の時の相手の顔は大体怪しい

76

大人は子供に道を示し間違いを許す物で

ある | 108

互いに本気でぶつかれば周りも飲まれる

物だ | 138

取材を受けて彼は自分の決まりを宣言す

る | 185

中華娘と生徒会長の襲来を受けて男は笑

## 2番目はまさかの〇〇!?

「断る」

「何故だ!? 貴方だって今回の事の重要性は分かっているはずだ!!」

もう何度目になるのか分からないその問答が始まるとある豪邸の一室、そこで高級なスーツを着た男と和服を着た男がいた。

片方は眉間に深いしわを刻みつけ、もう片方は額に脂汗を浮かべて和服の男に縋りつく。  
く。

和服の男は面倒臭そうに頭に手を当てて溜息をつく。

「何度も言つて居るだろう? 私はそんな事に付き合える程、暇人ではない」

「しかし! 貴方は〔2人目〕なんですすよ!! 貴方には現状、莫大な利益が出るじゃないですか!!」

「利益がどうした？ そんな物に興味など無い」

2人の男の会話は2時間近くずっとこの調子で平行線を進んでいる。スーツを着た男も粘り強く和服の男と交渉を続けているが和服の男はいい加減に帰ってくれないか。という感情が顔に出てきているのかスーツを着た男の顔がひく付いている。

「貴方の立場は理解しているつもりです……しかし、こればかりはどうにも出来ないんですよ。私が離れるとどんな事が起きるか」

「いえ、ですから！ そちらに関して私達の更「貴方達の？ まさか日本の暗部である『更識』を自分の私兵のだとも言うつもりですか？」ツ!？」

その瞬間、和服の男から出るオーラが一瞬で変化した。

先程までの気だるげな雰囲気は消え去り、その全身から鬼の様なオーラが一気に放出する。

スーツを着た男は一気に額からの脂汗が増え、歯が上手く噛み合わないのかガチガチと不快な音が響き渡る。

何とか深呼吸をすることで少しはマシになったがそれでも恐怖は引いていないのか、眼が物凄く泳いでいた。

「なあ？ 聞いているんだよ……何時から更識は貴方達の私兵になったんだよ？」

「い、いいえ！ そ、その様な事は決して有りません!!」

「そうですよね？ 更識からそんな報告は一切聞いていないので……」

和服の男はそれだけ言うのと放出していたオーラを消し、再び面倒臭そうな雰囲気に戻っていく。

それを見てスーツの男は一気に力が抜けたのか肩で息をするように上下させ始める。

「まあ、そういう訳でもう帰ってください。私もこれ以上は時間を取れませんので」

「ま、待つてください！ それではあまりにもツ！」

疲れた様に肩を回して退出を進める和服の男に縋りつくように頭を下げるスーツの男。

そんなスーツの男を見る和服の男の目は何も映していなかった……

「……なあ、しつこい。こつちが優しく言ってる内にやめておけよ？」

「し、しかし!! それでは私達は「重要人物保護プログラム」っひ!!」

「忘れていないよな? お前らが勝手に決めて実行に移そうとしたクソみたいな計画だ」

和服の男は先程のオーラでスーツの男がそれ以上、話が出来ない様に威圧する心なしか、その目は少し光っているようにも見えていた。

「アレを止めたのは俺達だ……お前等、アイツ等の身の安全を守るとか言って置きなが



ら実際はただ逃げない様に監視してただけだったよなあ？ あ“あ“

「お前等、『あの事件』の後には一切何もしなくなったよな？ まあ、俺達がアイツ等の身の安全を守るようになったからだろうが……だがよ、その後は一切何もしないってのはどういう事だったんだ？」

耳が痛いというのはこの状況を言うのだろう。スーツの男は最早顔面蒼白などと言う物ではなく、ブルーマンも真つ青な程に顔が青くなっていた。

その様子を見た和服の男は話すことは何も無いと言う様に立ち上がり、控えていた一人の女性に声をかけた。

「マドカ、お客様がお帰りになる。お見送りを」

「はっ！ 親父殿!! ……おい、こつちだ。さっさと立て!!」

マドカと呼ばれた女性は綺麗なお辞儀をするとスーツを着た男を玄関まで引きづるように運んで行った

改めてその部屋からようやく人が居なくなつたのを確認した着物の男は脱力して携帯を取り出し、どこかに電話をかけ始めた。が、相手側は「コールで即座に応答した。」

『もすもす終日〜?』

「束か……こつちは終わった」

『あつ、ようやく? も〜遅いよお〜』

「すまん、相手があまりにもしつこく食い下がってきてな……やんわりと断っていたらこんな時間になつた」

『もう、らーくんは甘すぎるんだよお〜あんな凡人なんかに優しくしちゃつてさあ〜?』

「そう言うな、あんなのでもこの国では必要な人材だ。少しは恩を売って置いた方が良  
いんだよ」

束と呼んだ女性のおんまりな言葉に思わず苦笑する和服の男は、手元の書類に目を向けながら少し体を伸ばした。そしてある程度ストレッチをすると気持ちを切り替える様に再び真剣な様子で電話口の束に対して口を開く。

「それで……何か分かったか？」

『うーん、ごめんねえ。データが少なすぎて何でいつくんとらーくんが【IS】を動かせるのかは分からなかったよ』

「そうか……まあ、仕方が無い、か。気にするな、束」

本気で申し訳なさそうな声で謝罪する束に対して特に気にしていない様に返事をする和服の男は、逆に束に対して申し訳ない気持ちになっていた。

「俺の方こそ、忙しい束に対して無茶な事を頼んだ。すまなかった」

『そんな！ 全然だよ!! 私も気になってたし、それに……らーくんには返しても返し

きれない恩が有るんだから！」

「そんな物は無いさ。俺は俺がやりたくて色々手出ししただけだ」

『またまた謙遜しちやつてさあ』

「親父殿……」

束と電話をしていた男の背後から先程、マドカと呼ばれた少女が頭を少し下げながら遠慮気味に声をかける。

「外務大臣は先程送り返しました。その報告を」

「ああ、わざわざすまん。マドカ、面倒臭い仕事だっただろう？」

「いいえ、あれ以上は親父殿の手を煩わせる訳には行かなかったので……」

「そう思ったのはお互い様さ、マドカ。お疲れ様」

和服の男はそう言ってマドカの近くに寄って下げていた頭を優しく撫でた。

マドカもそれをとんでも気持ちよさそうに喉を鳴らして喜ぶ、その見た目はまさしくご主人に撫でられて喜ぶ家ネコのようなだった。

『むくらーくん！ マドっちばかりに構ってちゃ駄目なんだぞー!!』

「ああ、すまなかつたよ束」

「年下に嫉妬するなど見苦しいぞ、篠ノ之束」

『うるせえやい!』

「喧嘩するなって……」

「お嬢……おやつさん」

電話越しにやいのやいのと2人が喧嘩をするのを頭に手を当てて呆れていると扉をノックして1人の男がいそいそと入ってくる。

その男の顔には頬に1本の刀傷が付いており、歴戦の戦士を思わせる風貌をしていた。

「カイか……どうした？」

「はっ……先程『更識』のご隠居様の奥方から連絡がありました」

「都紀からだ？」

東に一言、断りを入れてからマドカに携帯を手渡してカイに向き直る和服の男。そのままマドカと東はギャーギャーとケンカの様な電話を続けている。

「で？ 一体どんな要件での連絡だった？」

「それが……先程の外務大臣に対しての謝罪らしいのですが」

「何だ、そんな事か。気にするなと伝えておいてくれ」

「いえ、実はそれだけじゃないんです」

「何だと?」

「何やら……おやつさん、真木まき 雷光らいこうは【I S 学園】に来るのか聞いて欲しいと」

カイのその言葉を聞いて真木 雷光は少しポカンとした表情を浮かべ、動きが止まってしまう。

少し呆気にとられた雷光は溜息をついてそのまま部屋を出て行ってしまった。

「カイさん、親父殿はどうしたんですか?」

マドカは束との電話を終わらせたのか片手に雷光の携帯電話を持ちながらカイに質

問をする。

「ああ、いや……おやつさんはI S学園に行くのかって更識家の奥方から連絡が有つてな」

「都紀さんが？ 一体何を考えているのやら……」

「恐らく、現当主がI S学園に居るからじゃないのか？」

「ああ、楯無か。確か今は生徒会長をやっているんだったか？」

「そうだ。それにおやつさんとはもう何年も直接は会えていないからな。それもあんな連絡を入れて来た原因なんじゃないか？」

「日本の暗部の現当主でも、やはり人の子だな」

「はっ、どの口が言っているんだよ」



少し馬鹿にした様に笑うマドカの頭を優しく撫でるカイ。

マドカも少し嫌そうな顔をするだけで特に手を払うような事をせず、されるがままになっている。

「お前がここに来た当初からは考えられないな」

「ああ、私としても信じられないさ。私がここまで変わるなんて……」

「後悔しているか？ そんな風に変わった事を」

「まさか、それこそあり得ないさ」

顔に少しだけ影を落としながら自虐するように笑ったマドカに対して、少しだけ心配そうに声をかけたカイの質問に満面の笑顔で答えるマドカ。

「私は……あの人に、この【真木組】に救われたんだ」

「……良い顔で笑えるようになったじゃねえか」

「五月蠅いぞ、カイさん」

「なあ、都紀さんよ。アンタも頭は大丈夫か？」

「連絡をくれたのは良いんだけど開幕から酷い言い草じゃない？ 雷光君」

「あまりにも予想外なアホな質問をされたんだ。初っ端から悪態を付きたくもなるだろう……」

マドカがカイとじゃれ合っている頃、雷光は屋敷の固定電話から先程電話を寄こして来た更識に対して少しの悪態を込めて電話をしていた。

「それで？ お宅は一体何を考えているんだ？」

「まあ、考えているのは織斑一夏君の護衛を貴方に頼みたいって事ね」

「一夏なの？ それだったら貴方の所の当主がやれば良いだろう？ 現生徒会長なんだろう、確か？」

「そうなんだけど……刀奈ちゃんは今、世界各国からの要望を対処するのが忙しいみたいで」

「成程な……それで同じくI Sを動かした俺に護衛の依頼を出したいって訳か」

「話が早くて助かるわ」

都紀からの気の抜ける様な内容の話聞いて雷光の額の皺は物凄く深く刻まれていく。

その様子は仕事を片付けた端から新たな仕事を持ち込まれるブラック企業の平社員の様だった。

「あのなあ、生憎と俺は俺の組から離れる訳には行かねえんだよ」

「雷光君が心配しているのって離れている間に敵対している組織が何かするかもって不安が有るからでしょ?」

「そうだよ……俺らの世界は隙を見せればやられる世界だ。それは貴方の家も良く知っているだろ」

「うん、嫌って程ね。でも……『日本で最も力を持ち恐れられている最凶の極道』においてそれと手を出すところが有るの?」

「日本国内には無いと思うが……最近では外国のマフィア共からのちよつかいが何件か確認されている」

「外国からか……でも、貴方の組は貴方が離れるだけで崩れる程信用できないの?」

「そんな訳あるか……だがな」

「だがな、じゃない!」

耳元で手榴弾が爆発でもした様な怒声が雷光の耳を襲い、一瞬だけ目の前が揺れた。あまりの衝撃に少し音が聞き取りにくそうに片耳を抑えながら電話を続ける。

「貴方は自分の組の人達を信じてるんでしょ!? だったらそれに任せて貴方を必要としている子供達の方に行くべきよ!」

「子供達って……」

「一夏君や篝ちゃん、それに簪ちゃんに刀奈ちゃん達だって貴方の所の子供みたいな物でしょ?」

「前者2人は確かにそんな感じだけど、後者2人はお宅の家の子だろうに」

「そうだけどそうじゃないんだってば！」

「分かってるよ……」

都紀の言い分に納得はしている様に頭をかいて答える雷光。

その様子が電話越しに分かるのか、くすくすと笑う声が聞こえてくる。

「だったらもう諦めて来てしまいなさいな」

「……はあ、他にも反論を用意しているんだろ？」

「ええ、勿論。それにそっちの懸念はこっちでも対処するわよ」

「……出すのか？ お前の懐刀の6人を」

「ええ、そっちの幹部7人と合わせて13人ね」

「またアイツ等が集まるのか。それだったら勝てる奴など殆どいないな」

「そういう事。だから安心しなさい」

覚悟を決めたのか、雷光はそのまま電話を切り再び自分の部屋へと戻っていった。

「それで親父殿。 I S 学園に行くと言うのは本気ですか？」

「ああ、楯無からの要請でも有るからな」

「【真木組】はどうするのですか？」

「それに関しては家の幹部と楯無の懐刀6人を集結させる」

「本当ですか!?! おやっさん!」

マドカとカイが目をむき驚いて叫ぶ。  
特にカイの方は驚き、興奮している。

「ああ、任せるぞ。カイ」

「……任せてください、おやっさん」

「親父殿、私は……」

「マドカ、お前は俺と一緒に行くか？」

「一緒に？　ですが……」

雷光に誘われた事にとっても嬉しそうに目を輝かせるマドカだったが、その内容に少し躊躇う様に俯いてしまう。

「マドカ……」



「無理だったら俺達と留守番でも良いんだぞ？」

「……いや、私も付いて行くよ」

拳を握り、覚悟を決めた顔をして雷光とカイに力強く宣言する。

その宣言を受けて、カイは嬉しそうに満面の笑みを浮かべ、雷光は安心した様に目を伏せる。

「本当に良いんだな？」

「はい、大丈夫です！」

「……そうか。それじゃあ、仕度をしておけ」

「分かりました！」

「カイ……分かってるな」

「勿論だ、おやつさん。記憶してるさ」

カイは真剣な顔をして自分の頭を指でコンコンと叩いて示す。

その内容は2人にしか分からないようでマドカは首をかしげて見つめている。

「さて、久し振りに子供達の顔を見に行くとするかね」

「そう宣言した雷光の顔はとても獰猛そうな笑顔だった」

## 自己紹介は腹から声を出せ

(こ、これは……なかなか、気まずいってレベルじゃないぞ)

クラスの最前列の中央の席に座りながら世界で初めて「IS」を動かした男、織斑一夏は身体を縮こまらせていた。

その姿に向かって教室中から好奇の視線がずっと晒されているのだから、こうなるのも当然のことだと言えるだろう。

周りからの視線に耐えられなかったのか堪らず窓際の方を見てみると、不意にそこにいた少女と目があつた。

(ほ、箒!! 頼む、助けてくれ!!)

彼女は一夏のその視線を感じ取るが、ふいと顔を外へ向けた。

(そ、それが久し振りに会った幼馴染に対する態度かよ!?)

「全員揃ってますねー。それじゃあS H R始めますよー」

『はーい』

黒板の前に立つ女性副担任こと山田真耶先生はにこりと微笑む。

しかし、一夏はそれに対して反応が示せない程に頭の中で現状をどうやって打破するかを考えている。

(親父さん……この場合は俺は一体どうすれば良いんですか?)

(一夏よ……男だったらどっしりと構えている)

「……………くん?」

（流石は親父さん!! 分かった! 俺、どっしりと構えて……）

「織斑一夏くん!!」

「は、はい!?!」

脳内で自分の親とも言える存在に質問をしていた一夏はいきなり大声で名前を呼ばれ、返事をした声が裏返る。案の定、くすくすと笑い声が周囲から漏れ、小さく縮こまる一夏。

「あ、あの大声出しちゃってごめんね? 怒ってる? 怒ってるかな? でもね、あの自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。自己紹介してくれるかな?」

山田真耶は縮こまったままの一夏に対してぺこぺこと頭を下げていた。何度も頭を下げている所為か、微妙にサイズの合っていない眼鏡がずり落ちそうになっている。

「あの、普通に自己紹介しますから、先生、少しは落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対ですよ！」

ペコペコと下げていた頭をガバツと一気に上げ、一夏の手を取って熱心に詰め寄る真耶。その行為が更に注目を集めていた。

しかしそう約束してしまった手前、引くわけにもいかない。一夏はしっかりと立ち上がり、後ろを向く。

(うつ……)

その瞬間、教室中から向けられていた視線が一気に増えた様に錯覚した。男子の自己紹介ということもあり、先程よりも全員が食い入る様に見つめているのは違いないが……

「お、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

無難な自己紹介が出来たと一夏は満足していた。だが、男子に飢えた獣のような女子達は視線だけで「それだけか？ おら。もつと喋ってよ」と語っていた。まだまだ肌寒い時期だというのにだらだらと背中に流れる汗を感じながら、一夏は一呼吸置いて……力強く宣言する！

「以上です!!」

がたたつ、と思わずつつこける女子生徒達と背後から山田麻耶の「あ、あのー」と涙声成分二割り増しの声が聞こえてくる。

それを聞き、自分がなにやら失敗した事に気が付いたのか続けて何かを言わなければと口を開こうとした次の瞬間にはパァンツという音と共に一夏の頭部を鋭い衝撃が襲った。

「いっ——ッ?」

丁度自分が最も痛く感じる威力、角度、そして速さ。その全てが自分のよく知る人間が放つ物と同じだと感じ、一夏は恐る恐ると振り返る

「げえっ、項羽様!？」

「誰が項羽様だ、どっちかというと虞美人だ」

「いや、それは無【スパアン!!】あだあ!？」

一夏が反論すると同時に先程の力以上で思いつきり頭部を叩かれる。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田くん。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

一夏自身も聞くのは久しぶりな優しさに満ち溢れるその声は、とても先程から自分に對して理不尽に出席簿アタックを振るっている人物だとは思えない。

「い、いえっ。私だって副担任ですから!」



先程の情けない姿からは想像も出来ない程に自信にあふれた声で千冬に答える真耶。  
そんな彼女に対して頷いて生徒達の方に向き直る千冬。

「諸君、私が君達の担任の織斑千冬だ。私の役目は君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てる事にある。私の言う事はよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には私がとことん分かるまで、出来るまで指導しよう。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛えぬく事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

少しだけ含まれている暴力的な発言に今、自分の目の前にいるのは間違いなく自分の姉だと実感する一夏。

しかし、千冬の宣言にクラスの女子達はざわめきを上げずに変わりにとても大きい黄色い声援を上げた。

「キャーキャー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっと前からファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から!!」

「私は北海道から!!」

「毎年毎年、よくもこれだけ多くの馬鹿者を集められるな。感心させられる。それともアレか？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

例年通りなのか、その声援を心底鬱陶しそうにかつ生徒達に聞こえるように愚痴るが、それすらも女子達はポジティブに受け止めていた。

「キヤー！ 千冬様！ もっと呆れて！ 罵ってええ!!」

「でも偶には優しくしてえ!!」

生徒達の興奮ぶりに頭が痛そうに手を頭に当てて千冬は今だに呆然として一夏を睨む。

「でだ。お前は挨拶も満足に出来んのか？」

「いや、千冬姉、俺は」

「パンツッ！ つと本日三度目の快音が一夏の頭から響いた。その頭からは勢いからか白い煙が上がってしまっている。」

「織斑先生と呼べ」

「………はい、織斑先生」

その自然なやり取りと一夏の呼び方で千冬と一夏が姉弟であることを納得するクラスメイト達。

「まずは諸君等にこれからI Sの基礎知識を半月で覚えてもらう事になる。いいなら返事をしろよ。良くなくても返事をしろ。私の言葉には必ず返事をしろ」

家にいる時のだらけ切った様子とは打って変わった軍隊のような鬼教官っぷりを発揮する姉に一夏は苦笑する。

それだけ言い、SHRの終わりを告げようとした千冬だったが、そこで彼女の携帯電話が鳴り始めた。

「つと、失礼」

「珍しいですね、織斑先生がマナーモードにしているなんて」

「ちよつと今日は大事な連絡が来る筈だから分かるようにしていたんだ」

「大事な連絡？」

「ああ……はい、お待たせしました」

（千冬姉に大事な連絡？ 学校関係だったら呼び出せば良いんじゃないのか？）

「はい……はい、分かりました。それでは、お迎えに参ります」

「お、織斑先生？」

「すまない、真耶。私は今から【あの人】を迎えに行ってくる」

「わ、分かりました！」

「良いか諸君!!」

真耶と小声で話していた千冬は真耶の了承を得るとクラスを見ながら大きな声で話を聞くように促す。

それを受けて、先程まで騒がしくしていた女子生徒達もすぐにピタツと静まり返った。

「私は今からこのクラスに入る人物達を迎えに行く。すぐに戻ってくるので大人しくし

ているように！」

「「「「はい!!」」」」」

「では、真耶。行ってくる」

（千冬姉があそこまで言うなんて……一体誰が来るんだ？）

「で、では皆さん。まずは次の授業の準備をしておいてください」

真耶のその一言で先程まで大人しくしていた女子生徒達は一斉にタガが外れたかの様に騒ぎ出す。

その様子は、まさしく中学や高校などで見られる休み時間の現象と同じだった。

「先生！ 一体誰が来るんですか？」

「わざわざ千冬様が迎えに行くなんて本当に凄い人なんですか？」

「どこかの国の王様とか？」

「いやいや、実は千冬様の隠し子とか！」

（千冬姉に隠し子!? そ、そんなの聞いたこと無いぞ!?）

「あ、あのく皆さん? ですから、次の授業の準備を……」

「山田先生は知ってるんですか？」

「知ってるなら教えてくださいよろしく」

「え!? えっと……わ、私も織斑先生の古くからの友人としか知らないんですう……」

「千冬様の古くからの知り合い!?」

「益々気になる〜!!」

「でも、そんな人が何で今日 I S 学園に？」

（確かに……何で今日なんだ？）

そんな風に全員が千冬が迎えに行った人物に対する考えを思い思いに口にかけていると廊下からコツコツと足音が聞こえてくる。

足音は教室で話している生徒達の声の中でもハッキリと聞こえ、その音に気が付いたのか話していた女子生徒達も話すのを止めてその足音に耳を向ける。

音は一つではなく、3人分の様に聞こえ生徒と真耶はすぐに千冬が戻ってきたのだと察する。

「( )か」



「では、私が入るので合図をしたら入ってきてください」

「ああ、分かった」

そんな会話が廊下から聞こえるが生徒達は全員、首を傾げた。今の声は……男性の物だったからである。

「ねえ、今の声って……」

「男性……だよね？」

「織斑君以外にIS学園に男性が？」

ひそひそと生徒達が話す中、一夏は自分の耳を疑っていた。

（今の声……まさか!?!）

一夏がその考えに至った瞬間、教室の扉が開き千冬が戻ってくる。

「諸君、待たせた。実はこのクラスにもう2人入る事になっていた人物たちが到着したので紹介する。入ってきてください」

「失礼する」

千冬が入室を促すと廊下から2人の男女の声が聞こえ、そのまま教室に入ってくる。

片方の男性は一夏達とは違い、IS学園の制服ではなく和服をしっかりと着こなした大人。

しかし、その男性よりも教室の全員の視線はその横にいる少女に向かっており、その片方の女性の顔を見て教室の全員は息をのんだ。

なぜならその顔は………織斑千冬と瓜二つだったのだから。

「お、織斑先生が……」

「千冬姉が……」

「……………2人いる!？」

一瞬で騒然となる教室と混乱する生徒達。止めようにも真耶までもあまりの事態にてんぱり、眼をグルグルと回してしまっている。

その様子を表情一つ変えずに見つめる千冬にそっくりな少女は、共に入ってきた男性に向かって視線を向けて何やら指示を待っている様になっている。

「マドカ……挨拶をしてあげなさい」

「はっ！ 親父殿!!」

2人のやり取りを見て、人知れず微笑みを浮かべるのは騒ぎの一端にいる千冬。

マドカはそのまま頭を下げ腰をかがめ、左手を膝に当て、右手を手のひらを上に向け三つ指を突き出し声を高らかに宣言する

「お控えなすつて!!」

堂々とした立ち振る舞いとその声量から混乱に陥っていた教室が一瞬でシン……と静まり返る。

マドカはそれを気にする事無く、名乗りを続ける。

その姿は、自分の誇りを示すかの様に……

「私は、生まれも育ちも日ノ本は武蔵の国。人々の闇の中で闇の人間の道具として生き、長らく闘争の中に身を置いておりやしたが……姉兄達の助けにより己を真に人間として見定め、人としての歩み方を模索する日々に置かれていやす」

「【真木組】が1人、織斑マドカと申す者でありんす」

マドカの名乗りが終わるとその傍に控えていた男性がパチパチと拍手をする。

その様子にただ茫然として見ているだけだった一夏達だったが千冬が倣う様に拍手をするとまばらながら生徒達も続くように拍手をし始め、段々と収まると男性が口を開く。

「マドカ……とても良い名乗り方だった。教えた甲斐が有ったな」

「ありがとうございます。親父殿」

「皆、驚かせてすまなかった。私達は今日からこの教室で君達と共に学ぶ友と思ってくれている。」

雷光はそれだけ言うともまるでもう終わったかのように千冬に顔を向けるが千冬はまだ終わっていないと言わんばかりに首を横に振る

「雷光さん……マドカの紹介はしたが貴方は自分の紹介をしていないでしょう」

「ええ？ 俺もしないと駄目？」

「駄目です」

「そっか……まあ、仁義を通さないのは俺としても嫌だし、良いか」

それだけ言つて雷光も先程のマドカのような姿勢を取り、その視線を鋭く声も一瞬で切り替えた。

「お控えなすつて……」

先程の優しい声色から一瞬で王の様な貫禄のある重い声色に変えられる。

「あつしは、生まれも育ちも日ノ本は武蔵の国。仁義を重んじる世界に長らく身を置き、鉄火場と闘争の匂いを嗅ぎ続け生きてきやした」

「名を【鬼神】 【仁義の鬼】 等々有りやすが、今はこう名乗つております」

【真木組 会長】 真木 雷光と申す者でござんす」

「流石は親父殿……私と比べると名乗りもしっかりとしている。私はまだまだ、だな」

「お前も充分としつかりとしていたさ。マドカ」

「ありがとう……姉さんと呼んだ方が良いか？」

「好きな様に呼べば良いさ……ただし、学校では織斑先生しか認めないがな」

「了解しました……織斑先生」

# 喧嘩は相手を見てから売れ

「親父さん!!」

「雷光さん!!」

一時間目が終わり、休み時間に入った瞬間に一夏と箒は示し合わせた訳でもないのに、ほぼ同時に雷光の元に笑顔で駆け寄ってきた。

その様子に苦笑いしながらも答える雷光。

「久しぶりだな。一夏、箒」

「はい！ 親父さんも元気そうで!!」

「あの……雷光さん。姉さんが迷惑かけていませんか？」



雷光の返事に満面の笑みで答える一夏と姉が何か迷惑をかけていないか心配する箒とそれぞれの違う反応に雷光は変わっていないなど内心で安心していた。

「箒、そんなに心配しなくても東の奴は良くやってくれているよ。逆に大人しくなっても不安になつてくるくらいさ」

「そ、そうですか。……良かった」

最後の方は蚊の鳴く様に小さい声だったが一夏と雷光の耳にはしつかりと聞こえていた。一夏はそんな箒をニヤニヤとした顔で見つめ、雷光はうんうんと頷いている。

「あつ！ それより親父さん!! あのバイト先、紹介してくれてありがとうございました！」

「ああ、いや。あれは丁度手が空いていた場所があったから斡旋しただけでそれ以降は俺は関与してねえよ」

「またまた店長から聞きましたよ？　なるべく面倒臭いお客が来ない時間帯にするようにしてくれてわざわざ店長にお願いしていたんでしょ？」

「……さあ、そんな事は知らないね」

一夏のカミングアウトを受けてばつが悪そうに顔を背ける雷光。身内に対しては肝心なところで爪が甘い様子も変わっていないように一夏は満面の笑みで、箒はクスクスと笑っている。

「あの……雷光さん。先程の」

「ああ、そうだ！　親父さん！　さっきの」

「マドカって誰だ（ですか）!?!」

自分達が最後に会った時には居なかった千冬にそっくりな織斑マドカという存在を先程知り、その存在について詳しい話を聞こうとする一夏と箒。

雷光は顎に手を当てて、少し考える様な仕草をするとマドカに声をかける。

「マドカ、ちよつと来てくれ」

「はい、親父殿！」

クラスメイト達から遠巻きに見られていたマドカはすくつと立ち上がると雷光の横に近づく。

「二夏、箒、それにクラスメイト諸君。改めて紹介しよう」

雷光はマドカの頭に優しく手を置き撫でながら声を少しだけ上げて紹介する。

「彼女は織斑マドカ。織斑千冬の遠い親戚で私が保護した少女だ」

「彼女は家庭事情が複雑で最近まで人間不信だったのだ。出来ればみんな仲良くしてあげて欲しい」

そう言いながら頭を下げる雷光とその行動に驚愕の表情を浮かべるマドカ

「お、親父殿!? わ、私の為にそんな頭を下げるなど!」

「マドカの、家族の為だったらこんな俺の頭なんぞ幾らでも下げるさ」

マドカに向ける雷光の真剣な眼差しに一瞬だけ言葉を失うマドカだったがすぐに持ち直して反論する

「有難いですけど! そういうのは私自身でします! 貴方はそう簡単に頭を下げていい立場の人じゃないといい加減に自覚してください!!」

「いや、でもな……」

「でも何もありません!!」

雷光の煮え切らない態度に腰に手を当ててプンスカと怒るマドカとその様子を見て苦笑する一夏と箒。そして漫才のようなやり取りに困惑するクラスメイト達。

何とか持ち直したのかマドカはクラスメイト達に向き直る

「あゝ、まあ、そんな訳で少しどころかかなり過保護な親と共に皆と過ごす織斑マドカだ。織斑先生やこつちの一夏とは遠い親戚に当たる。よろしくお願いいたします」

雷光に倣ったのか腰を45度曲げて頭を下げる綺麗なお辞儀を見せるマドカとそれに見惚れるクラスメイト達。

「こちらこそ、よろしく頼む。マドカ」

「おう！ こつちこそよろしく」

箒はマドカに向けて手を向けて握手をし、一夏は何処か複雑そうな顔をしながらもマドカと挨拶を交わす。

そこにひよこひよこ一人の少女が近づいて来る。

雷光はそれを目ざとく発見し、マドカの肩をトントンと叩く

「マドカ……お前にお客さんだ」

「？ 私に？」

「マ〜ちゃん、私ともよろしく〜！」

ダボダボの袖で手をブンブンと振り、マドカと握手をしている一夏の背後でピヨンピヨンと飛びながら自己主張する一人の少女。

彼女を見て、マドカは嬉しそうにその子の手を取る。

「本音じゃないか！ お前もやはり来ていたんだな！」

「うん！ マ〜ちゃんがIS学園に来るなんて聞いてなかったからびつくりしたよ〜」

本音とマドカは長年の親友のように嬉しそうに手を握りながら笑い合う。

2人のその様子を微笑みながら眺める雷光と本音の事を良く知らない一夏と箒は首を傾げる。

「あの親父さん、彼女は？」

「ああ、本音か？　彼女は俺の所の仕事で繋がりのある家の使用人で、マドカに初めて出来た友達なんだ」

「へえ、初めての友達がI S学園に……何か、凄い偶然だな」

「『全ての運命に偶然などない』」

「？　親父さん、何ですかそれ？」

「俺の友人が以前口にしていた言葉さ」

「すべての運命に偶然などない、ですか」

「そう、全ては偶然の様に見えて必然的な事だとアイツは言っていた」

「アイツと言うのは……」

箒が詳しい話を聞こうとした丁度のその時に、授業開始を知らせる鐘の音が響いた。それを聞くと雷光は手をパンパンと叩いて生徒達に着席を促す。

「ほらほら、みんな。そろそろ席につかないと織斑先生に怒られるよ?」

今の一言が効いたのか、立っていた面々はすぐに自分の席について授業の準備を終わらせていた。

本音もマドカに対して名残惜しそうに視線を向けるとそのまま自分の席に戻っていった。

—————

「——と、この様に I S の基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱した I S 運用をした場合は、刑法によって罰せられる決まりが存在して——」



(ほほう、何とも分かりやすい。教え方が的確なのは凄いな、彼女)

真耶の丁寧なＩＳ解説の授業を受けて、雷光は彼女に対する認識を再評価していた。

その時、雷光はふと気になって一夏の方を見ると少しだけ難しそうな顔をしていたが何とかついて行こうとノートに必死に書き写していた。

(一夏も別に問題は無さそうだな)

「ここらまで分からないところは有りますか？ 雷光さん、織斑君」

一旦そこで説明を区切り、分からない所が有るかどうかの確認をする真耶。

一夏と雷光は瞬時にアイコンタクトを交わして口を開く

「私は今の所は、問題ありません」

「俺の方も、今の所はなんとか大丈夫です」

「そうですか！ でも分からない所が出たりしたら遠慮なく言ってくださいね？ 私は先生なので！」

真耶はそう言つて胸を張り、授業の続きを始める。

千冬は一夏のその様子を少し意外そうに見つめていた。

キンコンカンコンコン

「あつ、終わりですね。それじゃあ続きは次の授業でします」

鐘の音を聞き、授業を終わらせた真耶は千冬と共に教室から退出していった。

2人を見送ると箒と一夏は雷光の元に一直線に向かつてきた。

「一夏、お前はちゃんと専門書を読んでいたんだな？」

思い出したようにそう言う箒と同じく感心した様に頷く雷光。

そんな2人の態度に照れる様に頭を手で搔く一夏。

「勿論だぜ。だってさ、前もって親父さんにも言われてたし千冬姉にも迷惑かけたくなくてさ」

「念の為について思つて忠告の連絡をしておいて良かったよ」

「あはは、お手数をお掛けしました……」

「成程、そういう事だったのか」

雷光の気遣いとその結果を目の当たりにして頷く筈と一夏。

そんな三人に近づくと一人の金髪少女

「ちよつとよろしくって。」

「ん？」

「む？」

「何かな？」

一夏、箒、雷光は三者三様の反応をしたが返事をされた相手の少女はその返答の仕方が不服だったのか顔に不快極まると書かれている様に見えた。

「まあ！ 何ですの、その返事の仕方は！ このわたくしが声をかけているのですよ？ もっと飛び上がる様に喜ぶなどは出来ないのですか？」

「はあ？ 何を言つて居るのだ、貴様は」

「ごめん、俺は君が誰だか知らないからさ……」

そのあんまりな態度に思わず不快そうに口を尖らす箒と面倒臭い相手が来たと頭を掻きながら謝る一夏。

雷光は今だに口を開かず、様子を見ている。

「わたくしを知らない!? この I S 学園の入試を首席で突破したわたくし「セシリア・オルコット」ツ!?」

「英国の代表候補生にして 4 6 7 機しか存在しない I S の専用機「ブルー・ティアーズ」の操縦者にして英国の貴族令嬢。そんな君が私達に一体何の用かな?」

自己主張を始めようとしていたオルコットを名前を呼ぶことで止め、そのまま彼女に對しての詳しい説明を口にした雷光に一夏と箒は目を丸くし、そこまでの事を知られていたのに気を良くしたのか機嫌を持ち直すセシリア。

「あら? そちらの男性は弁えているようですね」

「これから共に学ぶ者だ。名前や国を調べるのは《大人》として当然の礼儀さ」

「ふふん、良いでしょう。貴方は良く分かっていますわ」

「……で、一体何しに来たんですか？」

その怒りが湧く言い草にグツと堪える様に我慢して話を聞く一夏。  
セシリアも本題を思い出したのか一夏に向き合い目的を話す。

「ええ、I Sを動かした男性がどの様な人物なのか見極めようと思ったのですが……1人は何も知らない子供でもう1人は礼儀『だけ』は弁えている男性だと分かりました」

「……俺の事は別にどう思われたって構わねえけどな、お前は親父さんを馬鹿にしに来たのか？」

「一夏、相手がどんなに失礼で嫌だと思っても相手の内面を詳しく知るまでは決して態度には出さないと以前教えたよな？」

「そうだけど……でも」

「まあ、お前のその真つすぐな感じは俺は好きだし分からなくもねえが我慢してこそ漢だぞ」

「……分かったよ」

2人のやり取りに置いてきぼりを食らったセシリアは先程の機嫌がまたしても下がったのか不愉快そうに眉をひそめる。

「わたくしを無視して……先程の評価を覆させていただきますわね。貴方もどうやら礼儀がなっていないようですわ」

「すまないね、貴族と聞いていたから君を大人として礼儀を通そうと思ったのだが先程の言動から君はどうやらまだ子供だったようだからね」

「私を馬鹿にしていますの!?!」

雷光の言い分に怒り心頭と言った具合に顔を真つ赤にし詰め寄ろうとするセシリア。

一夏もセシリアのその行動を止めようとしたが動く前に全てが決着していた。

「自惚れるなよ……英国かぶれ」

「ひっ!?!」

先程まで本音とその友人達との会話をしていた筈のマドカが鬼の形相で一瞬でセシリアの喉元に手を突きつけ、睨みつけていた。

その動きは剣道全国大会優勝者である筈ですら目でギリギリ追えた程の速さだった。

「貴様如きが、親父殿の相手など100年速いッ!!」

「マドカ、止めなさい。相手はまだ子供だ」

「しかし親父殿!!」

「良いから、心配をかけた。すまないな」



そう言つてマドカの頭を撫でて止める様に促す雷光と渋々とそれに従うマドカ。

2人の様子は他のクラスメイト達にはそのシーンだけを見れば親子だと満場一致で言えたがその前の行動のせいで全員の中のひとつの言葉が浮かび上がった

(((((親子つて言うよりは、忠犬と飼い主?))))))

「し、信じられませんか！ 何て野蛮何でしょう!? 極東の島国と言うのはここまで未開の地なのですか!？」

「いや、今の原因はどっちかって言うとおルコットさんじゃ」

「うむ……」

「むぐう!!」

マドカの行動と態度に信じられないとばかりにブツブツ言うセシリアだったが前後

の行動が原因だと一夏と箒の両名から突っ込まれると自覚していたのか口をつぐむ。

「ほら、もう次の授業が始まるよ？ 席に戻りなさい」

「はい」

「親父さん、また後で」

「雷光さん、また後程」

「つく！ 後でまた来ますわ!! 絶対に逃げないでくださいね!!」

（逃げるも何も何処にも行かないんだがなあ）

捨て台詞を吐きながら席に戻っていくセシリアに対して元気だなあと思いながら次の授業の準備を始める雷光。しかし、その顔は先程よりは穏やかではなく、少しほんの少しだけ怒りが有る様に見えた。

授業開始の予鈴が鳴り、真耶ではなく千冬が教卓に上がり手に持った出席簿から一つの書類を取り出した。

「授業を開始する前に決めなければいけない事がある。再来週に開始されるクラス対抗戦に出場するクラス代表を決める」

千冬はその連絡を受け、一気にざわつき始める教室。

「クラス代表とはその名前の通り、このクラスの代表にしてクラス委員長といえる存在だな。クラス代表は対抗戦以外にも生徒会の会議への出席やクラス内での議長なども行つて貰うになるとても重要な役職だ。これは自薦推薦は問わない。一度決まったら一年間の変更が出来ない。それを心に諸君達で決めてくれ」

千冬その発言で教室中が更に騒がしくざわつく、そして一人の生徒が勢い良く手を上げる

「はい！ 織斑君が良いと思います!!」

「IS学園始まって以来初めての男性操縦者ですし!!」

「他のクラスには絶対に無い、このクラスだけのアイデンティティだね!!」

「うんうん！ みんなの注目の的、間違いなしだよ!!」

「ええ!? 俺え!？」

「五月蠅いぞ織斑。他には居ないのか？ 居ないのだったらクラス代表は織斑になるが

……」

「お、俺はそんなのやらない【バシイン!!】へふう!？」

「自薦他薦は問わないと言った筈だぞ。推薦で選ばれたのだ、覚悟を決めろ織斑」

「い、いや、だけど——」

「お待ちください！ その様な選出は納得が出来ませんわ!!」

千冬がこれで決定させようとしたその時、甲高い声を上げ、机を思い切り叩きながら立ち上がったのは先程一夏達に突っかつたセシリアだった。

「大体、このクラスの代表を珍しいなどと言うくだらない理由で男如きにするなど良い恥さらしです!!! わたくしに！ セシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえと言うのですか!?!」

「セシリア・オルコット嬢。少し冷静になりなさい。織斑先生は自薦他薦は問わないと言っていただろう？ 君は選ばれなかったのだから自薦という事で良いのではないか？」

「貴方は黙っていてくださいまし!」

ヒートアップしてきたセシリアを宥めようと雷光が優しく注意するが、その態度が気

に入らないと更に食って掛かるセシリア。

そんな二人の様子を見ていた一夏と箒とマドカの3人はチラッと雷光の方を見ると、その顔は笑顔では有ったが普段とは何か違うと直感で理解できてしまった。

しかし、そんな雷光の様子に気が付かないセシリアはそのまま続ける。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは最早必然の事！ それなのにただ物珍しさなどというくだらない物の為に極東の猿にされるなどお話しになりません！ わたくしはISの技術の修練の為にわざわざこんな島国に来たのであって、サーカスに入団するために来たものではありません!!」

最早暴走列車と言わんばかりの言動に千冬達は頭が痛くなってきた様で溜息が出た。

そして言うまでもなく、IS学園が存在しているのは日本でありそこには日本人が入学している。

彼女達、日本人の生徒はセシリアの物言いに不愉快極まると言った感じで睨みつけているがまだ言い足りないのかセシリアは止まらない。

「大体、文化としても今だに亢進的なこの国で暮らすこと自体、わたくしには耐えがたい苦痛——」

「英国だつて大差ないだろ……世界一不味い料理で何年連続の覇者だよ？」

「馬鹿者が……」

「なっ!? あ、貴方! 今、わたくしの祖国を侮辱しましたわね!？」

「先に侮辱して来たのはそっちだろうが!!」

「そこまでにしろ、この馬鹿者共」

一触即発の空気を切り裂いたのはイラついた表情を浮かべたマドカだった。

その顔と雰囲気から千冬と同じオーラを感じ、2人は一気に口を閉じた。

「ここはI S学園だ。幼稚園じゃないんだよ、くだらない事で一々争うのだったら他所

「でやれ」

「あ、貴方ね！ 言う事にかけて幼稚園ですって!？」

「何だ、自覚していなかったのか？ お前の先程の言動などお前の立場から考えれば絶対に言えないからそれも理解できない幼稚園児だと思っただよ」

「何を言っ居ますの？」

「マドカの言い分に何が言いたいのか理解できていないセシリアは睨みつけながらマドカに問いたです。」

「しかし、先程よりは少しだけ弱弱しいのはマドカの先程の行為を思い出した恐怖もあるのだろう。」

「セシリア・オルコット。貴様は日本人を……この日本国を侮辱する差別発言を連発していた事に気が付いていないのか？ 仮にも【国家代表】を指す【国家代表候補生】の人間がしている発言などでは無かったぞ？ そして……ISを作った人間の祖国はこ



の国だ！ まさか、そんな初歩的な事も理解できていないなどと戯言を言いはしないだろうな？」

「ッ?!」

自分のいままでの言動の問題点をマドカに的確に指摘されたセシリアはようやく気が付いたのか顔を蒼ざめさせて周りを見渡す。

そこには日本出身の人物達からの鋭い視線が有り、いかに自分が愚かな発言をしてクルスの半数も敵に回したのか嫌と言うほど理解し、顔を俯かせる。

「貴様のその発言は日本と英国で戦争を引き起こす引き金になりうるのだぞ！ それを理解しろ!!」

「お、おい、マドカ。もうそれ以上は……」

「……ですわ」

「なに？」

「決闘ですわ!!」

セシリアは先程までの蒼ざめた表情ではなく再び怒りに染まった形相でマドカと一夏に向けて宣言する。

マドカは「何を言ってるんだ、コイツ」といった表情で一夏は「え？　この状態でそれ言うの？」と言った表情でそれぞれその宣言を受ける。

「なぜ私がそんな意味のない事をしなければならん。お断りだ」

「逃げるんですの!?!」

「逃げるんじゃない、受ける気が無いと言っているんだ。貴様の勝負を受けて、私に何か得が有るのか？」

「ふん！　貴方、先程までの大見得を切っておいて負けるのが怖いんじゃないんですか

？」

「なぜそんな思考に至るのか理解に苦しむな」

「お、お、お、二人とも、一回クールダウンしなうぜ？」

「ここで逃げるなど所詮、貴方はその程度の存在だったという事ですわ！ 一体どの様に育ったらその様な存在になれるのやら興味が湧きますわね。何が仁義！ 所詮はマフィアかぶれ!! まあ、しかし貴方如きを育てた人ですから碌でもない人物なのでー」

その瞬間、この教室にいた全員は死んだ

否、この教室だけではなく学園に居る全員が死を幻視した

セシリアだけではない、一夏も箒も千冬も真耶も本音もマドカも全ての生徒、職員が息を止めた

その中でただ一人、ゆっくりと立ち上がりセシリアを見つめる。

しかし、その視線は冷たいなどという生易しい物ではなく、ただ真つ黒で何も映しては居なかった。

まるでブラックホールの様な深淵の深くに存在するような物だった。

「そこまでにしておけ、小娘。俺とて何度も無礼を働かれて許せる程慈悲深くは無いぞ？」

そこには……王がいた。地獄の王、閻魔などという曖昧な存在などではなくそれこそが地獄。

彼から放たれる気は最早王<sup>オーラ</sup>気と言える物であった。

「貴様、この国に喧嘩を売るだけでは飽き足らずマドカに何とほぎきやがった？ あ  
“あ”!?」

「ひっ！ わ、わた、わたくしは……」

「俺はな、自分が何と言われても別段気にしないんだが……身内を馬鹿にされたり、仁義

を侮辱されたり、身内に手を出されたりするのは最も嫌うんだよ!! お前は今! 俺の組と家族を侮辱しやがったんだ!! マフィアみたいな金さえ払えば何でもする外道共と極道を同一にしやがった!!」

そこには最早、先程までの優しかった雷光の存在は無く有るのは【日本最凶の極道真木組 会長】としての真木雷光が在った。

「貴様の先程の戯言、俺も付き合ってやる」

「お、親父殿……」

「マドカを侮辱した事、そして我が誇るである仁義と我が家族である組を侮辱した事を後悔させてやろう」

「あ、あああああ」

セシリアは最早目の前の存在の恐ろしさに両手で自身を抱きしめて震えるしか出来

なかった。

その様子を見て、興が削がれたと言わんばかりに王気を収め静かに席に着く雷光。

それによって他の生徒達、そして千冬達教師もようやく息を吸い込めるようになった。

「お、親父さん……」

「一夏、放課後に剣道場に来い。鍛えてやる」

「は、はい!!」

「みんな、済まなかった。私としたことが我を忘れてしまった」

全員の呼吸が落ち着いたのを見計らって雷光は頭を下げる

その様子を戸惑ったように見る生徒達の気配を察したのか千冬が手を叩き注意を向けさせる

「まあ、色々と有ったが一週間後にクラス代表を決める為にアリーナで決闘をしてもらう。メンバーは織斑、オルコット、マドカ、そして真木だ。異論は無いな？」

千冬の宣言に教室の面々は沈黙を持って肯定の意を示す。それを見届けると千冬は気を取り直す様に力強く宣言する

「では、授業を開始する!!」

## 密会の時の相手の顔は大体怪しい

「……そう、とても厄介な事になったわね」

雷光の怒りが爆発した日、某国に存在するホテルの一室。

そこでは金髪の女性が耳に携帯を当てて片手にカクテルを持ち、電話の相手と通話していた。

『ああ、お前の所が送り込んだ斥候からの情報だと「鬼神」がI S学園に入り込んだ』

「それは私も先程報告を受けましたわ。予想外でしたが……」

『【鬼神】は何が有っても組から離れないと思っていたのだがな』

「それ程、織斑一夏と篠ノ之箒が狙われる事を恐れたのでしよう」



何かに思いを馳せるかの様に金髪の女性は片方の腕を愛おしそうに触りながらそう吐き捨てる。

電話の相手は雷光の事を忌々しく思っているのかとても刺々しい様子だ。

『それで？』【例の計画】は何時、実行に移すんだ？』

「そうですね……私達がI S学園に怪しまれること無く入り込めるのは、学年別トーナメントの来賓としてでしょう」

『成程、そこで『種』が芽吹くのだな？』

「ええ、何て言ったってあの国は暗い事しかありませんので私達の身代わりになって貰いましょう」

2人の怪しい密会は夜がふけるまで続けられた。

—————

—————

「親父さん、どうするんですか？」

「何がだ？」

「いや、何がじゃないでしょ……」

セシリアからの宣戦布告を受けた日の昼、一夏達は食堂で各々の注文した品をつつきながら話をしている。

ちなみに、一夏は唐揚げ定食で箸はサバの味噌煮定食、マドカは蕎麦、雷光はきつね蕎麦を食していた。

「売り言葉に買い言葉で乗っちゃまった俺も俺だったけど……」

「所詮はまだ餓鬼だったって事だろ？」

「マドカの言う通りだ」

「箒にマドカ……お前ら何でそんな息ピッタリなの？」

「姉妹みたいに仲良いな、お前ら」

2人のあんまりな言い草に苦笑いする雷光と一夏。

しかし、マドカと箒は当然と言わんばかりにそっぽを向く。

「しかし……親父殿を侮辱した事に怒ってくれたのは、あ、ありがとう／＼」

（（か、可愛い））

少しだけ顔を赤くしながら最後の方は物凄く小さい声で言われたが3人の耳にはしつかりと聞こえていた。

4人の特別な雰囲気周りの生徒達は声をかけようとしては断念している様子を尻目にとある人物たちが突貫してくる。

「マ〜ちゃん！ 私達も一緒にご飯食べて良い？」

「む？ 本音か。勿論だ、こっちに来ると良い」

「やった〜！ ほら、かんちゃんも！」

「お、お邪魔します」

本音の背後からおずおずと顔を出したのは水色の髪 of 眼鏡を掛けた、内気そうな少女で彼女の顔を見た瞬間、雷光とマドカは目を見開いた。

「お、お前……もしかして」

「君は……まさか」

「簪か!?!」

「お久しぶりです。雷光さん、マドカ」

2人の反応が可笑しかったのかクスクスと笑いながら返事をする簪。その反応が見たかったとでも言いたいのかゆるゆるな顔をした本音。

「雷光さん、彼女は？」

「ああ、彼女は更識簪と言ってな。俺の組の仕事仲間兼幼馴染の娘だ」

「更識簪です。よろしくね」

「俺は織斑一夏。よろしく」

「私は篠ノ之箒だ、よろしく頼む」

互いの自己紹介を終えると本音と簪はトレーを机に置き雷光の横に座る。ちなみに簪は讃岐うどんでは本音はサンドイッチである。

「雷光さん、聞きましたよ。お母さんが色々としたみたいで」

「ああ、都紀の奴に言いくるめられた。アイツの交渉術は相変わらずで安心したよ」

「お母さんらしいなあ」

雷光は溜息をついていたが簪とマドカ、本音はその時の2人の会話が想像出来たのか可笑しそうに笑い合っていた。

そんな3人の様子を少しだけ羨ましそうに見る一夏と箒。

彼等は少なくともマドカよりは長い間、雷光にお世話になっている。そんな自分達が知らない雷光の姿を知っている3人に少なからず嫉妬してしまっているのである。

「親父さん、俺達を除け者にしないでくれ」

「ああ、すまんすまん。簪とも久し振りに会ったからな。つい長話してしまったよ」

「何だ、一夏。焼きもちか？」

「なっ!? そ、そんなんじゃねえよ!!」

「おりむく顔が赤いよ〜?」

「の、のほほんさんまで!」

一夏のあからさまな焼きもちに意地悪な笑みを浮かべ揶揄うマドカとそれに対してムキになってドツボに嵌る一夏。

その姿はまさしく兄妹の様に見えた。

箸は焼きもちを焼いているのがバレない様にそれとなく注意を促す。

「全く、みんな。食事を早く取らなければ午後の授業に響くぞ?」

「あつやベエ!! 確か午後の一発目って千冬姉の授業だろ!」

「それは不味いな。急いで食べてしまおう」

箸からの忠告を受けて1組の面々は急いで食事を再開する。

そんな中、1人だけ席を立つ雷光。

「あれ？ 親父さん、もう良いんですか？」

「ああ、喰い終わった。それと、俺は次の授業は野暮用で受けられん。千冬にそう伝えておいてくれ」

「分かりました、雷光さん」

「親父殿、私も……」

「いや、お前は教室で授業を受けておけ」

ついて行くこうとしたマドカに釘を刺し、雷光は食い終わった食器を返却口に置きその



まま何処かへと歩いて行つた。

「親父さん、何の用事なんだろうな？」

「さあ、あの人の組に関するんじゃないのか？」

「それだったら私も行きかけた」

「マウちゃんって本当に雷光さんが大好きだよねえ」

「確かに……」

1組の先程の騒ぎの前から薄々察していたマドカの忠犬振りに脱力する一夏と箒。本音に関してはそんなマドカが愛らしいのかにやけ顔が凄まじい事になっている。

「それはそうだ。あの人は私の全てだ」

食事を終えてマドカは真剣な顔で全員に向き直る。

その様子は周りで聞き耳を傾けていた1組の生徒だけでなく千冬に似た生徒が入ったと風の噂で聞き、一目その姿を見ようと集まっていた他の組や上級生達などの他の生徒達も分かったのか、食堂にいる全員が食事の手を止めマドカの話に耳を傾ける。

「いや違うな、訂正させてくれ。あの人とあの人の組は、私の全てだ」

「生まれてから一度も生きる目的も見つけられずに、人としてではなく、ただただ道具として扱われていた私に……」

「温かい手で包み込んでくれて、温かい言葉をかけてくれた」

「心を無くし、他人を信じられず、自分の強さしか信じられていなかった私に……」

「温かい心をくれた人……道具ではなく、人として、生きる道を教えてくれた人達ッ、だからッ」

最後の方はそれまでの自分の過去を思い出し出していたのかうつすらと涙が浮かんでいたがその顔はとて凛々しく美しくかった。

マドカのその顔を食堂にいた全員が見て、そんな同じような感想を抱いていた。本音はそんなマドカが誇らしいのか抱き寄せて頭を優しく撫でている。

「うん、うん!! まくちゃんは人間だし、私の自慢の友達だからね」

「いや違う。それは違うぜ、のほほんさん」

一夏は本音のその発言に待ったを掛けた。

それを受けた本音は不思議そうに眉をひそめる。

「それを言うんだつたら……『俺達の自慢の友達』だ」

「つぶ、ああその通りだな」

「うん……本音だけの友達じゃない、から」

「かんちゃん……おりむく、しののん」

「ふふつ、お前ら全員。最高の友だよ」

目に貯まっていた涙を拭いマドカも全員に笑顔を向ける。

その笑顔を見て思わず顔を赤くして再び本音たちに弄られることになるのは必然だった……

ちなみに、この様子を見ていた全ての生徒は後に結成される「マドカを暖かく見守る親衛隊」と呼ばれる組織に入ったと言う……

「こうしてお会いするのは初めてですね。学園長、轡木 十蔵」

「ええ、お噂はかねがね更識君から聞いているよ。真木 雷光さん」

一夏達の友情が深まっている時、雷光は十歳学園長と対面していた。その顔は真木組会長としての裏の世界の頂点としての顔で、十歳学園長も魑魅魍魎が蠢くI Sの世界の教育機関トップとして対面していた。

「今、この場に來たと言う事は……とても重要な内容だと思うのですが」  
「ええ、そうですね」

雷光はそう言って用意してあった複数の書類を手渡しで十歳に渡す。十歳も確かに受け取ったと頷きながらその書類に目を通し始める。

「以前連絡した通り、それが織斑一夏、並びに篠ノ之箒を狙う組織のリストだ」  
「現状だけでもこれだけ存在しているのですね」

苦虫を噛み潰したように呻く十歳と忌々しそうに頷く雷光。

「護衛として俺が一夏に、マドカを箒に当てるつもりではいるが……」

「何か気になる事でも？」

「……この学園に不審な人物が紛れ込んでいる可能性が有る」

まるで確信が有るかの様にそう宣言する雷光と心当たりが有るのか神妙に頷く十蔵。  
十蔵のその反応に胃が良そうな反応を示す雷光。

「意外だな。驚かないんだな」

「ここは国家間の干渉は受けませんがだからと言って産業スパイなどが入り込まないとは言えませんからね」

「だが、その言い方からすると大方の目星は付いていると言った所か」

「ええ……現状で怪しいのは米国、そして与する可能性が有るのはギリシャの代表候補

生ですわね」

「やはり米国か」

「おや、そちらも知っていたのですか？」

「最近、俺の組の島で薬物を売りさばいてる連中をとつ捕まえた」

「……確か、貴方の組では薬物などは」

「禁止どころか手を出したら肅清待ったなしだ」

「それを知らない外部の犯行……と言う訳ですか」

「ああ、アジトを突き止めて構成員を全員取っ捕まえて調べあげたら全員が米国のスパイだったよ……」

「大方、貴方達の組のイメージダウンさせ結束を脆くしようとしたのでしょね」

今時の極道にしてはとても珍しい体制に意外そうな顔をする十蔵とそんな反応をくつくつくと笑う雷光。

雷光としてはこんなやり取りはお約束の様な物で、彼は毎回このような反応を見るのが楽しみなのである。

「意外だろう？ 今時の組織にしては」

「はい。しかし、薬物などに手を出していないとなるとどの様に資金を？」

「簡単だ。弱きを助け、強きを挫くのが侠客だ。俺の組は古くからの侠客で極道。少しのみかじめ料と飲食業、賭博やその他は土木建設なんかも有るし、後はそうだな……」

そこで雷光は溜める様にしてじらし、笑いながら言う。

「仕事をしないで弱者達から金を雀り取り、天下りで甘い汁を貪り、他者の足を引っ張



り、金を盗むだけの墮落した悪徳な政治家やつらから金を奪り取るのさ」

「成程……そこは腐つてもと言った感じですか」

「綺麗事だけじゃ世は渡れねえ。だが、人の道を外れたらそれはもう終いだ」

「人の道、ですか」

「笑いたきや笑笑。こんな考えの奴が最凶の組と恐れられてる奴等の長だ」

「笑いませんよ。貴方の島での人達からの評判を聞けば、ね？」

「おいおい、まさかわざわざ行つたのか？」

「それは行きますよ……今後、仲良くする相手ですからね。情報収集は基本です」

十蔵は真木組の仕事を、地域住民などに休暇などの時に足を運び詳しい話を聞いてい

た。

すると、聞き込みをした全員が真木組が行う治安維持や仕事の斡旋などに感謝などを話しており雷光の信頼を裏付けていた。

「全く……貴方、良く喰えないとか悪戯好きって言われて無いか？」

「ええ、織斑先生や更識君に似たような事を言われていますね」

「だろうな……」

可笑しそうに笑う十蔵と疲れた様に呆れる雷光と先程とは逆の構図になったが仕切り直すかのように雷光は真剣な表情に戻る。

「それで？ 米国の代表候補生に注意を向けるか？」

「いえ、それだとバレルの可能性が有ります。現状は私が見張るので貴方は織斑君の護衛にだけ集中してください」

「了解した」

「それと……先程の様な事はなるべくしないようにしてもらえませんか？」

少し口を尖らせて注意する十蔵と何となく言いたいことが分かる雷光は苦笑いしながら首を横に振る。

「すまんが……身内を馬鹿にされるとどうしても抑えられなくてな。まだまだ俺も未熟だよ」

「その想いは確かに大事ですが……突然の殺気には生徒達が怯えてしまいます」

「申し訳ない。今後はなるべく抑えられるようにするさ」

「ええ、お願いしますね。本当に」

それだけ言うと2人はお辞儀をし、雷光は退室する。

しばらく、十蔵は雷光たちによつて起こる様々な出来事を予想し、面白ずに笑みを浮かべるのだった。

「では……双方、準備はよろしいでしょうか？」

「ああ、何時でも大丈夫だ」

「私も大丈夫です」

雷光と十蔵の会合が終わつた放課後、一夏と箒、そして雷光とマドカは剣道場にいた。現在は一夏と箒が防具をして向かい合つており真ん中に剣道部の部長が審判として立っている。

マドカと雷光はそれぞれ壁を背に2人の構えを見つめていた。

「親父殿……どちらが勝つと思いますか？」

「他のギャラリーは箒が勝つと思ってるだろう。何て言っただってアイツは全国大会優勝者だ」

「他のギャラリーは、ですか。つまり親父殿は……」

「俺は一夏だと思っね」

「では私は箒が勝つと予想します」

「おっ、だったら賭けでもするか？ 負けた方が今日の夕飯のデザートを奢るって奴」

「親父殿……年を考えてください。子供じゃ無いんですから」

「良いじゃねえかよ、組の若い奴らは何時もやってるじゃねえか」

「そうですか……はあ、まあ良いでしょう」

雷光の面白い事を考え付いたと言わんばかりの笑顔に飽きれるマド力だった。結局はその申し出を受け入れる辺りマド力も興味はあつたようだ。

「それでは……はじめ!!」

「ハア!!」

審判の号令と同時に一夏が箒に向かって踏み込み竹刀を振り下ろすが箒もそれを読んでいたのか慌てることなく竹刀で受け止めるがその力強さに少し体が硬直する

「この重さ……鍛錬は怠っていなかったようだな」

「当然だ! いつまでも親父さんにおんぶにだっこじゃ申し訳ねえしな!!」

「それは同感、だっ!!」

一夏の竹刀を押し返し、そのまま返す刀で一夏の胴体目がけて横なぎに振る箒。

それを一步後ろに下がることで回避し仕切り直しと言う様に再び構え直す。

「つたく、相変わらず攻めにくいな」

「そちらこそ……以前より重く速くなっているな」

(だけど、前に戦った時よりも隙が無い……流石は剣道全国大会優勝者つて所か)

(一夏、力の使い方が前よりも洗礼されている。雷光さんに教わったのか?)

「箒、次の一手で決着をつける。お前の本気を俺に見せてくれ」

「一夏……ああ! 私も全力を出してお前を打ち倒そう!」

2人は互いに頷き、それぞれが自分の奥の手を出す為の構えを取る。

一夏は目を瞑り、竹刀を両手で持ち天高く掲げ。箒は竹刀を腰に当てかがみ、居合の構えをする。

「我流……」

「篠ノ之流、奥義……」

「大神快!!」

「桜花!!」

「パン!!と空気が割れる様な音が鳴り響き、その勢いにギャラリーの面々が息を飲んだ。」

「あまりの攻防に付いて行けなかったが今の音で決着が着いたと分かったのか、どちらが勝ったのかざわざわと騒ぎ出し審判に視線を送る。」

「その視線を一身に受けた審判は、暫く考えると声を上げた。」

「この勝負、引き分けとする!!」





「え!? マドカと?」

「おう! コイツは強いぞ。何て言っただって剣を持たせれば組一番の腕だ」

「何を言うかと思えば……剣の腕の組一番など親父殿だろうに」

「まあ、俺は入れないとすればって事だよ。って訳でやってみるよ」

「それは有難い……何事も経験を積まないと意味がないからな」

一夏はそう言うのと再び防具を付け、構えを取る。

マドカもすぐに防具を付けお互いにお辞儀をして準備をする

「それでは……はじめ!!」

パァン!!

開始の合図と同時に一夏の竹刀がマドカの竹刀に叩きつけられた

しかし、マドカは一步も動く事無く受け止め逆に押し始めていた。

その光景に先程まで一夏と戦い力量を良く分かつている筈ですら目を見開いて驚愕した

「一夏のあの重い一撃を受けて微動だにしない、だと!？」

「一夏の剣は重さはあるがマドカは体の重心を全て一つの場所に集中させてそれを上回る力で受け止めたんだよ。体の余分な力を可能な限り削ぎ落してその分を自分の望む場所に分けた」

「だから、一步も動かずに受け止められた、と言う事ですか？」

「そうだ。まあ、そのコツを教えたのは俺だがまさかあそこまで出来るとは思わなかったよ」

子供の成長って言うのは随分と速い物だよなあと感傷深く思う雷光を他所に今度はマドカが攻勢に打って出ていた。

マドカの剣は箒の剣よりも少し速く一夏も追いつくことで精いっぱいだった。

「どうした、段々と遅くなっているぞ！ もっと打ち込んで来い!!」

「つく！ んな事を言ってたって!!」

「貰った!!」

「っしま!!」

バシン!!と一夏の一瞬の隙を付き、マドカの一撃が一夏の面に突き刺さった。

「そこまで！ 勝者！ 織斑マドカ!!」

審判の宣言を受け、再びギャラーと剣道部の面々からの拍手が鳴り響く。

防具を取り一息ついたマドカは頭を抑えながら地面に座り込む一夏に手を差し伸べる。

「お疲れ様。まあまあ、悪くは無い腕だったぞ」

「圧倒されてたけどな……やっぱり、親父さんの言った通り強いなあ」

「当然だ。私はまだ負ける訳には行かないさ」

「次は俺が勝つからな」

「ふふつ、ああ。期待しているぞ、一夏」

再戦の約束をして笑い合う一夏とマドカ。

そんな2人を放棄も羨まし気に見つめ、雷光も今後が楽しみだと言わんばかりに笑っている。

「さて、それじゃあ今度は俺が相手になってやる。ほら、箒。それに一夏とマドカも、ドンドン撃ち込んで来い!!」

「親父さんが相手かよ!! 結構今、疲れてて厳しいんだけど……」

「雷光さん……相手にとって不足なし! いざ!!」

「今日こそ、親父殿から一本取ってみせましょう!!」

「2人がこれだし……仕方がねえ、やるか!!」

「さあ、来い!!」

「それでは双方!! 準備はよろしいですね!？」

「「「いざ、尋常!!」」」

「「勝負!!」」

まさかの3対1という変則的な試合になったがギャラリー達や一夏達は時間も忘れ、この試合に熱中していた。

寮の門限時間ギリギリまでこの熱戦は続き、片付けなどで遅れた一夏達は寮監の千冬にこっぴどく叱られたという……

大人は子供に道を示し間違いを許す物である

「織斑、一週間後のクラス代表決定戦についてだがお前には専用機が手配される事になった」

雷光達が剣道の試合をした次の日の授業終了間際、千冬のその報告に教室がにわか騒がしくなる。

その重要な内容に一夏は重要さが少しは分かっているのか驚愕の表情を浮かべている。

「織斑、その顔をすると言う事は事の重要性を理解しているのか？」

「大雑把にだけど、確かISの総数はたったの467機しかなくてコアの売買や軍事利用もアラスカ条約で禁止されているんですよね？」

「そうだ、その貴重なISの1つがお前の専用機となる」



「さしずめ、男性操縦者のデータ収集と実験的な物が大体の目的だろうがな」

一夏の知識に千冬が答え、マドカが手配される理由を補足する。

千冬がなるべく包み隠そうとした裏の事情をバツサリと言つてのけたマドカに真耶や千冬はギョツと目を見開く。

「まあ、後ろ暗い思惑は気にしないで有難く受け取つて置け。力が有るのと無いのじゃ天と地ほどの違いが有るからな」

「親父さん……ああ、分かつたよ」

「あの……織斑先生？」

その時、1人の生徒がおずおずと手を上げて質問する。

千冬も向き直つて質問の続きを促す。

「なんだ？」

「ま、真木さんとマドカさんには専用機は配られないんですか？」

「あつ確かに!! 千冬姉!! 親父さん達には無いの〔バシン〕アダア!!」

「織斑先生だ! それについてだが」

「ああ、安心してくれ。私も親父殿も既に持っている」

マドカはそう言ってサラツとした感じにクラスに衝撃の事実をカミングアウトする。

雷光は少しだけ面倒そうに片方の腕に付けたプレスレットをトントンと叩く。それが雷光の専用機が収納されている。

「「「「「「ええええええええええええ!!」」」」」」」

「お、親父さん。いつの間に専用機を!」

「ああ、動かせると分かった時に政府から押し付けられてな」

「一度は返却しようとしていたが、相手方があまりにもしつこくて親父殿が渋々と仕方が無く受け取ったと言った感じだったかな」

あの時の役人達が雷光に対する恐怖を押し殺しながらも見せた誠意が無ければ雷光は受け取りもしなかつただろう。

しかし、マドカとしてはあの時の役人達が不満だったのだろう。思い出したのか少し頬を膨らませていた

「まあ、今のオルコットの實力から考えると戦う時は使う武装は一つだけだな」

「俺もマドカと同じだな」

「なっ!?! わ、私を侮辱しているのですか!?!」

2人の宣言に更に驚く一夏達だったがその中で唯一、怒りが爆発したのはセシリアだ。

しかし、立ち上がった瞬間にマドカに睨まれて怯み何も言えなくなってしまった。

「侮辱ではない……ハンデだ」

「は、ハンデですって!？」

「当然だろう？ 幾ら子供の遊び程度の物とは言え本気になる程、私達は大人げなく無いがそれですぐに終わってしまったてはお互いに申し訳ないだろう？」

何を当たり前な事を言っているのだらうと言った感じに首を傾げて辛辣に言い放つマドカ。

セシリアはマドカの言い分に顔を真っ赤にするが隣にいる雷光を恐れてか、暫く恨めし気に睨むとそのまま席に座る。

「それでは、本日の授業は終了とする」

セシリアが席に着くのと同時にチャイムが鳴り、千冬の号令と共にその日の授業は終わった。

一夏と箒、そしてマドカはそのまま訓練をするのか荷物を纏めてアリーナに向かって歩き始める。

しかし、雷光だけはそのまま教室に残ろうとしていた。

「あれ、親父さん？ 第三アリーナに行かないのか？」

「ああ、今日からちよつと用事が有って当分はそっちの訓練には行けそうにない」

「そうですか……残念ですけど、また次の訓練には来てくださいね？」

「では雷光さん。今日のメニューはいつも通りなので良いんですか？」

「いや、今日からはメニューを変える。変更した訓練メニューは既にマドカに預けているからその通りにやっておいてくれ」

一夏達にそう伝えると雷光は教室からいつの間にか消えていた人物の後を追う様に  
出て行った。

向かう先は……射撃演習場の有る第五アリーナ。

—————

パンパン!! 第五アリーナの射撃演習場に響く銃声。

現在、第五アリーナにはその銃声を響かせる生徒1人だけしかいなかった。

黙々と集中して射撃を行っているのは、セシリア・オルコット

彼女はスナイパーライフルの照準器を覗き込みながら次々に出現するターゲットを  
狙い、撃ち抜く。

(織斑一夏、織斑マドカ、そして真木 雷光。彼等の力の一旦は昨日剣道場で拝見した。  
ハツキリと言えば現状での私の接近戦での実力では、彼等に懐に入られたら勝ち目は限  
りなく無くなりますわ)

昨日、セシリアはアリーナでISの訓練を終えて寮に戻る途中に有った人ばかりを見

つけ気になったのでその人だかりの原因を見ようと周りの面々とその試合を目撃した。

一夏の重い剣、箒の速く鋭い剣、マドカの圧倒的と言える剣。そして……それら全てを軽く受け流し次々と打ち破って見せる真木 雷光の姿を。

（先程の教室でのマドカさんの言い分、大変悔しいですが認めざるを得ませんね）

（今まで出会った男性とは全く違う織斑一夏と真木 雷光。彼等は一体どうしてあんなにも他の男性達と違うのでしょうか……）

昨日からずっと考えている事に意識が向き始め、少しずつ的から狙いがズレ始めて一回休憩を取ろうと息を吐いた時、セシリアの背後から声がかけられた。

「中々の腕前だな」

「ッ!？」

突然話しかけられセシリアは思わず猫の様に肩を震わせて勢いよく振り返る。

そこに居たのは壁に背を預けて立っている雷光だった。

「なぜ貴方がここに居るのですか？」

「何故つて、射撃演習場に来るのに射撃をする以外に有るのか？」

「それはそうですが、他のレーンだって開いているでしょうに」

「まあ、本当は君に用事が有ったんだがな」

「射撃が目的ではないじゃないですか！」

さつきと言って居る事が違う雷光に思わずツツコミを入れるセシリアとその様子を面白そうにカラカラと笑う雷光。

揶揄われていると分かったセシリアは機嫌が悪そうにそっぽを向く。

「私に用事とは、私をからかう事ですか？ それでしたらお互い時間を無駄にしま



うのでお帰り下さい」

「まさか、そんな事の為に俺が後進の育成をほっぽり出すかよ」

「では、一体何が目的なんですか？」

セシリアの鬱陶しいような態度を受けて笑顔だったら雷光は真剣な表情でセシリアに向き直る。

その表情を見て昨日の雷光の怒りを思い出してしまい、体が震えるセシリア。

しかし、その震えを押し殺して彼女は2人で会えた時に言おうと思っていた台詞を口にする。

「あ、あの……せ、先日は貴方の家族を侮辱する発言をしてしまい、大変も、申し訳ございませんでした」

「ほお？ 意外だな、君が私が何か言う前に謝罪するとは……」

「幾ら頭に血が上っていたとは言え、あの様な物言いは貴族としても人として言つてはならないものでした。それに対する謝罪が出来なければ、私は貴族である資格は有りません」

「そうか。そうか……」

セシリアからの謝罪と、その中に有る誠意を受け取り雷光はセシリアに向ける視線を幾分か緩くする。

「先程の質問に対する答えの目的だが……もう達成された。だが今、新しく出来た」

「はあ？」

「俺がお前を鍛え上げる」

「ハア!? なぜ貴方が私を？」

「敵情視察だけで済ませるつもりだったが、気になる事が結構出来たからな」

「さて、まずはさっきの射撃だが前半は良かった。だが、後半から君は射撃中に余計な事を考えてしまっていただろう」

「え!? え、ええはい。クラス代表決定戦の対戦相手を考えました」

「だろうな……大方、昨日の俺達の特訓を見ていたんだろう?」

「はい、とても凄まじかったです。まさかあそこまでの実力者だとは……」

「そして君は負けていられないと奮起し射撃訓練に精を出しているが、アイツ等に接近戦に持つて行かれた場合を想定してしまった」

「……」

「恐らく、君は射撃に特化しているせいで近接格闘が苦手だな?」

「はい。私は確かに近接格闘は苦手です。しかし、それを補う射撃精密が……」

「甘い!!」

自身の弱点を言い当てられムキになり言い返そうとするがそれを雷光の一喝によって止められる。

雷光の様子は昨日の怒りとは違う物で、どちらかと言うと人生の先を歩む先人としての物だった。

「自身が得意とする分野を伸ばすのは確かに良い。しかし！ 自身が苦手な分野を代わり一切しなくて良いと言うわけでは無い!!」

「それは……確かにそうなのですが」

「そうだろう……だからこそ！ セシリア・オルコット、俺は今から一週間で君を彼等と同等に戦えるように鍛えよう」

「なっ!? いきなり何を言つて居るのですか!?!」

突然の宣告に驚くセシリア。それも当然であろう、先日のアレ程自身が怒らせた相手  
が何を血迷つたのか自分を鍛えるなどのたまつたのだから。

「理解できないか? これでも俺は今君と同じ教室で学んでいる。それだけで十分す  
ぎる理由だ」

「そんな理由で!? 昨日、あんなにも貴方達を侮辱した私に貴方は手を伸ばすといふの  
ですか!?!」

「確かに俺としては許せないさ。家族を侮辱されたのだから」

「だつたら何故!?!」

「決まっている。もう謝罪を受けたからだ」

「君からの誠意ある謝罪を受けた。まあ、これが組に対する敵対者だったら許さないが今は同じ仲間だ。それなのに何時までもそれを引きづるのは子供じやないか」

それだけ言うと雷光は笑ってセシリアの頭に手を置く。

雷光のその手には暖かな思いや優しさが込められていた。

「温かい……この手。そんな相手に私は、私はっ!!」

「後悔したのだったら、後はそれを二度としないように心掛けていれば良いんだ」

「はい、はいっ!!」

今までの自分の態度を許した相手の度量に瞳から涙が零れるが泣かない様にとその涙を必死に止めようとするセシリアとその努力を見ない様に頭を撫で落ち着かせる雷光。

そこには昨日の険悪な様子などは最早存在していなかった。

「……落ち着いたか？」

「はい、御見苦しい所をお見せしましたわ」

「何を言ってる？ どこも見苦しい所なんて無かったさ」

先程泣いたのが恥ずかしいのか顔を赤く染めて俯くセシリアにカラカラと笑ってフオローする雷光。

「さて……それじゃあ、さっきの続きだがオルコット」

「あの……オルコットではなく、セシリアとお呼びください」

「良いのか？」

「ええ、教えていただくのですから名前と呼んで欲しいのです……」

「分かったよ、セシリア」

「はい！」

名前で呼ばれて嬉しいのか笑顔になるセシリア。

もしセシリアに犬の尻尾が有ればブンブンと振られているであろう。

「先程の射撃だが、君はどうやら後半になると肩に力が入り過ぎている」

「肩に力が入り過ぎている？」

「ああ、だから射撃の時はもつと力を抜くんだ。こんな風に」

雷光はそれだけ言って先程セシリアが行っていた武器と同じものを取り、的に向けて射撃する。

そのままの中心を的確に撃ち抜いて見せる。



「こんな感じで撃つ時に、君の場合は肩に余計な力が籠っている。だからその余分な力を重心を抑える場所に持つて来れば良い」

「成程……そういう事だったんですね」

「……よし、セシリア。君のISの武装はライフルの他に銃火器は有るのか？」

「いえ、近接用の武装が一つです」

「むつ、そうか……」

「雷光さん？」

「済まない。セシリア、ちよつとISを装備してアリーナの方に行こう」

「分かりました」

「さて、今からやるのは君の近接格闘の役に立つ物だ」

「いえ、それより雷光さんはＩＳを纏わないんですか？」

アリーナに移動した２人だったが雷光の方はＩＳ用の剣と盾、そしてマシンガンをつを持ってセシリアに向く。

戸惑うセシリアを他所に雷光は剣と盾を構える。

「ああ、俺のＩＳは今は整備中でな。クラス代表決定戦までには終わるからそれまではスペアで用意していた武装だけしか使えない」

「そうでしたか……分かりました」

「質問は以上か？ だったら始めよう。セシリア、まずはこの武装を君に使える様に設定してある。これを装備してくれ」

「サブマシンガンを？ 分かりました」

セシリアは雷光に言われるがまま、自分の武器スロットルにサブマシンガンを2つ追加する。

それを確認すると雷光は射撃演習場に有ったサブマシンガン2丁を持って見せる。

「良いかセシリア。銃火器と言うのは何も狙撃だけが使える時ではない。小型の銃火器は近接戦でこそその真価を發揮する」

「そうなんですか？」

「ああ、見ている」

雷光はそれだけ言うとりモコンを操作してアリーナの練習機能を開始する。すると周囲に人型的やバルーン型の出現する。

「こんな感じに付近に敵がいた場合、小型銃器を手に接近し、こうする!!」

人型的に一瞬で近づくとその的に向かって拳を振り下ろし、背後の的にはもう片方の腕に持った銃器で撃ち抜く。

放たれた銃弾はそのままバルーン型的の中心を捉え、撃ち抜き破裂させる。

「これが近接戦での銃器の使い方だ名をガン||カタと呼ぶ」

「す、凄いですね……」

「これを物にすれば君は他の相手と戦う時も接近戦で後れを取ることは無い」

「成程……これは確かに接近戦では強いですね」

「さあ、早速練習だ。やってみなさい」

「はい！ 分かりましたわ!!」

雷光のお手本を見てセシリアも同じように拳的を殴った直後にマシンガンの引き金を引き撃ち抜く。

その呑み込みの速さは流石は代表候補生と言った物で次々と的を撃ち抜き、腕を振りながら引き金を引き、マシンガンを握ったまま的を殴ったりとフェイントなども段々と混ぜ込むようになってきた。

(この成長速度……流石は代表候補生にして専用機を持つことを許された存在だけ有るな)

セシリアに存在した予想以上の成長速度に雷光は舌を巻く。

そして脳内で計画していた特訓内容に少しの修正を加えることにした。

「よし、セシリア。今日はこれまでにする」

「ありがとうございます」

「明日からは更に実戦的な訓練を開始するからそのつもりで」

「実戦的な訓練ですか？」

「詳しくは明日に説明するが怪我などはしないように気を付ける様に」

「分かりました……」

「それでは、解散だ。私はアリーナの片付けと明日以降の使用許可を貰っておくよ。君が授業が終わったらこのアリーナで準備をしておくように」

「準備はI Sなどのですか？」

「ああ、君のI Sだけで良いからね」

それだけ言うと雷光はセシリアに手を振りアリーナを後にする。

向かう先は先程サブマシンガンを持ち出した射撃演習場。

そこにサブマシンガンを置き、そのまま職員室に向かった。

「……本当に、不思議な御方ですわね」

セシリアはそんな雷光の後姿をただ眺めているだけだった。

「今日はＩＳを纏っているんですね」

「昨日アリーナの使用許可と同時に借りる手続きをしてきた。まあ、織斑先生には渋い顔をされたがな」

普通は専用機を持っている雷光はその専用機を使うべきなのだが雷光のＩＳは現在、雷光専属のＩＳ整備士に渡してしまっている為に使用が出来ない。

それを知らなかった千冬は物凄く渋い顔で雷光とその専属を自称する整備士に恨み節を吐いたのだ。

「さて、セシリア。今日の訓練だが……」

「はい！ 何なりとお申し付けください！」

「君の武装を私に向けて撃て」

「分かり……ませんわ!? なぜ突然ブルーティアーズを撃てと言うのですか!?!」

突然の命令に思わず了承しかけたが内容を聞き、即座に拒否するセシリア。

それに対してキョトンとした表情を浮かべる雷光。

「何でそんなにキョトンとされているのですか!?! キョトンとしたいのは私の方です  
!」

「いや、私は盾とか有るし大丈夫だから」

「その自信はどこから出てくるんですか!?!」



「まあまあ、騙されたと思って撃って見なさい」

「……どうなつてもしりませんからね！」

セシリアはもう諦めたかのようにスターライト mark III を構える

そのまま雷光に向けて引き金を引くと青いレーザーが迸る。

レーザーが雷光に着弾する寸前、彼は装備していた盾を振りレーザーの機動を変えてレーザーを受け流す

「なっ!?!」

「こんな風にレーザーも盾や他の物でも案外簡単に受け流すことが出来る。マドカだつたら断言するがレーザーを切り裂く事だつてするぞ」

「そ、そんな事が可能なのですか!?!」

「出来る……試しに見せてやろうか？」

雷光はそう言つて葵を構えてセシリアにレーザーを催促する。

促されたセシリアも頷き、スターライトmarkⅢの引き金を引く。

放たれたレーザーは真つすぐに雷光に向かうが雷光はそれを一瞬で切り裂いて見せた。

「ほ、本当に……レーザーを切り裂いた。しかも、量産機の武装で？」

「こんな感じに、タイミングと適切な力で振れば切り裂ける。だが、重要なのはそこじゃない」

「今のが試合中だったら君は驚いて動きを止めてしまうだろう。今日からするのは何が有つても動じない心を鍛える事だ」

「何が起きてても動じない心？」

「ああ、これは【明鏡止水】という」

「明鏡止水……」

「そうだ。その極意を君に伝授する。だからこれを付けなさい」

そう言つて雷光が取り出したのは目を覆い隠せる程の布だった。

「これをどうするんですか？」

「これで君は目を隠して感覚だけで私の攻撃を避けるんだ」

「ですがそれでもハイパーセンサーが……」

「何の為の特訓だと思つている。勿論切るに決まつている」

「わ、分かりましたわ」

言われるがままにハイパーセンサーを切り布を目に当て、視界を遮る。

目の前が真っ暗になり目の前に居た筈の雷光の気配も感じなくなり不安になるセシリア。

「御始めは怯えてしまうだろうが、それも直ぐに慣れる。これで視覚やハイパーセンサーが使えなくなった状況でも気配を探れるようになる」

「ほ、本当ですか?」

「俺を信じろ。これを物に出来れば、君は更に強くなれる」

「……分かりました! やってごらんに見せますわ!!」

「よしっ、では行くぞ!!」

こうしてクラス代表決定戦までの間、セシリアは地獄の特訓を繰り返して行くことに

なるのだった。

互いに本気でぶつかれば周りも飲まれる物だ

「なあ、箒。それにマドカ。今日はクラス代表決定戦だよな？」

「ああ、私の記憶ではそうだと思うが？」

「私の手帳にも同じように書かれているな」

「じゃあさ」

「何で俺の専用機は未だにここに無いんだよ!？」

クラス代表決定戦の当日、第1アリーナのAピット。そこには試合に出る一夏とマドカ、そして応援のために来ていた箒の3人が存在した。

しかし、そこには本来ある箒の一夏の専用機は影も形も無く試合の開始時間は刻一刻

と近づいており焦りを見せる一夏。

「落着け一夏。こんな時は慌てても仕方が無い。漢だったらどっしりと構えている」

「いや、そうは言ってもさあ。アリーナの使用時間だって限られてるんだぜ？」

「その時は私が出ただけの事だ」

「お、織斑君！ 織斑君！ 織斑君!!」

「や、山田先生。落ち着いてください」

Aピットに転がり込む様な勢いで入ってきた真耶は一夏の名前をずっと呼び続けるほどに慌てており、箒が何とか宥めようとする。

「い、一体どうしたんですか？ 山田先生」

「山田先生、深呼吸しましょう」

あまりの慌てように一夏が逆に落ち着きマドカが真耶に深呼吸するように指示を出す。

「はい、吸って〜吐いて〜」

「すうー、ハアー」

「吸って〜『吸って〜吸って〜吸って〜吸って〜吸って〜』おい一夏あ!？」

「すうーすうーすうーすうーすうー」

「吐いて！ 吐いて良いんですよ山田先生え!!」

「教師で遊ぶんじゃない!!」



バシイーン!!

「アダア!?!」

一夏の悪ふざけによって吐かずに永遠と息を吸い続ける真耶に吐く様に指示する箒。  
そしてそんな一夏の悪ふざけに対して天誅を下す千冬。

「それで? 織斑先生に山田先生。慌てて来たと言う事は遂に来たのですか?」

「は、はい! 遂に来ましたよ! 織斑君の専用機が!!」

「そういう訳だ。大至急で最適化を行う急げ、アリーナの使用時間は限られているんだ」  
「わ、分かりました!」

急いで先に行く真耶と千冬の後を慌てて追いかける一夏とそれに続いて箒とマドカ

も歩き出す。

5人が到着した所には『白』が有った。

「これが織斑君の専用機【白式】です!!」

「これが、俺の専用機……」

「すぐに装着しろ。時間がないから初期化と最適化は実戦でやれ。出来なければ負けるだけだ、分かったな？」

「あ、ああ、分かった」

千冬の中々の無茶ぶりに戸惑いながらも領き、すぐにISを纏う一夏。そんな一夏を心配そうに見つめる箒と少し考える様になっているマドカ。

ISを纏った一夏は確認するように手を開いたり閉じたり歩いてみたりなどをして  
いる。

「動作は問題ないか？」

「ああ、行けるぜ。千冬姉」

「おい、一夏」

「何だ？ マドカ」

先程まで何かを考えていたマドカはそこで遂に口を開く。

カタパルトにISを乗せようとしていた一夏はマドカに向き直った。

「恐らくだが……セシリアは一週間前よりも圧倒的に強くなっている。気を付けろ」

「……ああ！ 分かっている」

マドカからの忠告を受けて一夏も気持ちを引き締め直しカタパルトにISを設置し、アリーナに顔を向ける。

千冬もそれを見て、アリーナへのゲートを開く。

「勝つて来いとは言わん。全力で戦つて来い。」

「勿論だ!! 行つてくる!!」

その宣言と共に一夏はピットからアリーナに飛び出す。

凄まじい加速と共に一瞬で青い空が見え、その中央に青いISを纏ったセシリアが悠然と佇んでいた。

—————

「あの、何故雷光さんがこちらに居るのでしょうか?」

「クラスメイトがこれから戦うのに応援に来ては可笑しいのかな?」

一夏達が専用機が届くのを待っているのと同時刻、反対側に存在するピットでセシリ

アと雷光が対面していた。

セシリアは集中していたのか目を閉じていたが、雷光の気配を感じ取ったのか目を開けた。

「それにしても……一週間でよくここまでなったな。俺の気配にも気が付けた」

「お父様の訓練のお蔭ですわ」

「お父様、ね。その呼び方は初めてで新鮮だな。大体はみんな親父かおやっさん呼びだからな」

「まあ、それは光栄ですわね」

雷光とのやり取りが可笑しかったのかクスクスと笑うセシリアと新しい呼び方に少し嬉しそうにする雷光。

「さて、もうすぐ一夏との戦闘だが……必ず勝てとは言わない」

「何故ですか？」

「物事には絶対などという物は存在しないからだ」

「絶対は存在しない？」

「ああ、不測の事態が起きる可能性も有る。だから俺は絶対に勝てとは言わない。ただ、**【全力で戦え】**それだけだ」

「……分かりましたわ」

雷光からのアドバイスを受けたセシリアは頷き、そのままピットからアリーナに飛び立っていった。

彼女のその姿を雷光はただ見つめていた。

「待たせたな、オルコットさん」

「いいえ、専用機が先程ようやく届いたと織斑先生から通信で聞いておりました」

「そうだったのか？ まあ、それでも待たせたのは事実だ。すまなかつた」

先にアリーナで待機していたセシリアに対して遅れた事に対して謝罪する一夏。  
そんな一夏の様子にクスリと笑うセシリア。

「ふふつ、貴方はお父様が言った通りの人物の様ですわね？」

「お父様？ それって……」

「織斑さん、試合が始まる前に言わなければいけない事が有りますわ」

一夏が聞こうとした時、セシリアは真剣な顔をして一夏に向き直る。

セシリアはそのまま一夏だけではなく、ピットの中にも聞こえる様に通信の設定を弄り頭を下げる。

『織斑さん、そしてマドカさん。一週間前に教室で貴方達に対する数々の無礼な物言い。本当に申し訳ございませんでした』

「オルコットさん……」

「セシリア・オルコット……」

『あの時、私はとても愚かな発言をして貴方達を傷つけてしまいました。あの様な発言、謝って済む問題ではありませんが……謝らせてください』

「……顔を上げてくれ、オルコットさん」

一夏からの呼びかけに恐る恐るといった風に顔を上げるセシリア。  
彼女の目に飛び込んできたのは満面の笑みを浮かべた一夏の姿だった。

「ありがとう。謝ってくれて」



「正直さ、あの日にあんなことを言われて本気で腹が立ったよ。親父さん達の事をろくに知らない奴に一方的に馬鹿にされて親父さんが何も言わないのを良い事に言いたい放題言われてさ」

「でも、それを反省して謝ってくれたんだろ？ だったら、俺は許すよ。マドカには後で直に謝って上げてくれ」

「ええ、勿論そのつもりですわ」

「そっか……それじゃあ、後顧の憂いなく戦えるな！」

「はい！ わたくしも、全力で戦わせて頂きます!!」

互いに構え、眼差しは自然と真剣な物になる。

その瞬間、試合開始のブザーが鳴り響いた。

「さあ、踊りなさい！ このセシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲<sup>ワルツ</sup>で!!」

「踊るのは苦手なんで、お断りさせてもらうぜ!!」

ブザーが鳴り響くと同時にブルー・ティアーズから青白いレーザーが百式に向けて放たれた。

一夏はそれを咬み一重で回避し、武器の刀を構えながら突撃する。

「今のを回避するとは、流石ですわね」

「初撃は気を付けるべしって教わってるからなあ!!」

そのまま刀を力いっぱい振り下ろす一夏だったがセシリアはそれを危なげなく回避するとブルー・ティアーズの宙に浮いた四基の非固定武装が射出する。

「貴方の剣は重く直撃すれば恐ろしい事になるでしょう。ですので、早々にファイナーレ

と参りましょう！ やりなさい、ブルー・ティアーズ!!」

「それがマドカの言っていた、オルコットさんのI Sの切り札！ 自動遠核兵器か！」

一夏の周囲を縦横無尽に動き回るブルー・ティアーズ。

その銃口は全て一夏をしつかりと捉えていた。

「避けれるので有れば避けてみなさい!!」

その宣言と共に全てのブルー・ティアーズから一斉にレーザーが放たれる。

一夏はその内の一つに剣を当て、レーザーをそのまま受け流す。

受け流されたレーザーは迫っていた他のレーザーに当たり包囲網に一つの穴が出来上がり、そこに向けて一夏はすぐさま加速して脱出する。

しかし、セシリアは焦ること無くそこに向けてスターライトmarkⅢの引き金を引く。

ブルー・ティアーズのレーザーよりも太いレーザーが一直線に一夏に迫る。

「つく!! まだまだあ!!」

レーザーを視認した一夏は軌道はそのままに剣を水平に構え一気に切り裂く。

「レーザーを切り裂いた!？」

「アイツの腕前だったら不思議ではない。私も出来るからな」

「凄いですね、織斑君。乗り始めたばかりだとは思えません」

ピットではセシリアと一夏の激闘を観戦している面々の驚愕の声が上がっていた。

箒と真耶は一夏のその行動に驚き、息を飲んだ。

マドカと千冬は表面では冷静にしていたが、一夏の実力でそこまでの芸当が出来たことに内心では驚愕していた。

「だが……」

「不味いな、……オルコットの猛攻が止まらない」

「「え？」」

「良く見てみる、普通は自分の攻撃を切り裂かれたら驚いて動きを止めるか焦りを見せるだろう？」

「だが、オルコットは驚く素振りも見せず的確に一夏に対しての追撃を続けている」

千冬とマドカに言われ、箒と真耶は再びセシリアに対して注目し直す。

確かにセシリアは焦る様子もなくブルー・ティアーズとスターライト mark IIIで一夏に反撃させる暇を与えない様に連続で攻撃を叩き込んでいる。

「ほ、本当です！ 切り裂かれたりしても動じることなくそのまま追撃しています！」

「一夏を間合いに入れさせない様にしっかりと距離を取りながら的確に打ち込んでいる

……」

「以前、公開されていた試合映像の時よりも圧倒的に強くなっている」

「ええ、入試の時の様子からは考えられない程の実力です」

「この一週間に、一体何が有ったのでしょうか……」

「恐らくだが……親父殿が原因だろうな」

マドカのその一言で箒と千冬が納得した様に頷いた。

真耶だけは首を傾げていたが、千冬から話を聞いていたので何となくだが納得はした。

「真木さん、凄いですね。私、自身無くしちゃいます」

「何故だ？ 山田教諭」

「え？」

セシリアの成長を目の当たりにして少しだけ暗くなつた真耶に対して首を傾げるマドカ。

真耶に真つすぐと視線を向けてマドカは嘘偽りのない言葉を告げる。

「貴方の教え方は私としても分かりやすい。親父殿だつて貴方の教え方はとても分かりやすいと褒めていたぞ」

「そ、そうなんですか？」

「ああ、親父殿があんな風に褒めるといふ事は貴方の教え方は本当に分かりやすいと言ふ事です」

「だから自信を持ってください。貴方はとても素晴らしい教師です」

「あ、ありがとうございます！」

マドカの言葉に籠った気持ちを受け取り、眼に涙を溜めてお礼を言う真耶。  
そんな二人を見て口元を少しだけ上げて微笑む千冬。

（真耶は自信の無さが欠点だったが、この様子だと大丈夫そうだな）

「ああー！ 一夏あ!!」

3人のやり取りを眺めていた箒がモニターに視線を戻すとブルー・ティアーズとスターライトmarkⅢの一斉射撃を躲し切れずに直撃を受けて爆風の中に消える一夏の姿が映し出されていた。

「お、織斑君が！」

「……フツ」



「ま、マドカ？」

「気が付いたか、マドカ？」

「ええ……ようやくですよ」

「あ、あの織斑先生？ 一体どういう事ですか？」

「機体に救われたんだ。あの馬鹿者は」

千冬のその言葉の後、爆風が一瞬で消し飛んだ。

その中央には真っ白い機体に包まれた一夏の姿がそこには有った。

「その姿は……」ファーストシフト「次移行!?! まさか貴方は、今まで初期設定だけの機体で戦っていたつて言うのですか!?!」

「時間が予想より掛かったけど、これでようやく全力で戦える」

「……成程、その為に懐に入ろうとせずには避けるだけだったのですか」

「舐めていると思われたのなら謝罪する。それでもピットで約束したことが有つてな」

「いいえ、私も全力で戦えとお父様に言われているので。ようやく、憂いなく戦えますわね」

セシリアは油断なく、ブルー・ティアーズをさつきよりも早く飛ばしスターライト m a r k III を構え直す。

一夏も新たに変わった近接特化ブレード ゆきむらにがた 雪片式型を構え、先程よりも更に加速されたスピードで一瞬で自分の得意とする間合いに入り込む。

「貰った!!」

「甘いですわよ!!」

一夏はセシリアの胸を狙い全力で剣を振り抜くが、セシリアはスターライト mark III を放り投げ手に近接用武装であるインターセプターを呼び出しそれを受け流す。

そのまま返す刀で一夏の腕に向けてインターセプターを振り下ろすがこれも一夏は回避する。

「射撃だけだと思ってたけど……近接戦闘も出来るのかよ」

「近接戦は苦手ですけど、一切手を付けないという訳ではありませんわ」

「違いねえ、な!!」

気合を入れなおした瞬間、一夏の雪片式型が淡く光り出すが一夏はそれに目する事も無くセシリアに猛攻を続ける。

インターセプターを使い、受け流すセシリアだが攻撃が掠った瞬間に自分のシールド エネルギーが異常に減らされた事に気が付き驚愕の表情を浮かべた。

（か、掠っただけでここまで減らされた!? 幾ら織斑さんの刀が重いからと言ってこれは異常ですわ!!）

「今度こそ、貰ったあ!!」

「まだですわ!!」

止めを刺そうと突撃してくる一夏に向けてセシリアは奥の手の一つで有るブルー・テイアーズのミサイルビットを射出し2つのミサイルを発射する。

「げっ!？」

それを見た一夏は慌てて片方を切り裂き、もう一つを回避するがその瞬間に雪片式型の光が消え試合終了のブザーが鳴り響いた。

【試合終了 勝者 セシリア・オルコット】

一瞬、何の事が全員が分からなかったが試合が終わったと理解したのか観客席に居た1組の全員は大歓声を上げた。

セシリアと一夏も暫くは呆然としていたが理解したのか互いに手を差し出す。

「何か良く分かんなかったけど、良い試合だったよオルコットさん」

「こちらこそ、勉強になりましたわ。それとセシリアと呼んでください」

「良いのか？　じゃあ、セシリア。今度は俺が勝つ」

「ふふつ、今度も私が勝たせていただきますわ」

互いに全力で戦えたからか満面の笑みを浮かべ健闘を称え合う2人。  
そんな2人をピットから見ていた雷光も満足気に頷いていた。

「で、何で俺は負けたんだ？」

「機体の特性を理解していなかったのが原因だな」

一夏の疑問をバツサリと切って捨てたのはISを纏ったマドカだった。

マドカのその言葉に良く分かっていない様な顔をする一夏。

それを見て溜息をつく千冬が先程の試合の終盤の一夏の画像をモニターに映し出す。

「見てみる、お前の武装が光っているだろうか？」

「え？ あつ本当だ、何時の間に？」

「む、無意識に発動していたんですね」

「一夏……物事に集中しすぎると周りが見えなくなるのは相変わらずか」

あんなにも光っていたのに気が付いていなかった一夏に苦笑いする真耶と呆れる箒。そんな面々を置いておいて千冬は話を続ける。

「織斑、お前のこの武装はISのバリアを無効化する機能がある」

「バリア無効化!？」

「そ、それって織斑先生がモンド・グロツソで優勝した時と同じ!」

「ああ、全く同じワンオフ・アビリティ単一仕様能力が発現した」

「そ、それってあり得るんですか!？」

「あ、あのワンオフ・アビリティ単一仕様能力って何ですか?」

一夏と箒がおずおずと手を上げて質問する。

それを見てまだ授業で説明していなかったな、と思い至った千冬が簡単に説明する

「ワンオフ・アビリティ単一仕様能力は、ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する固有

の特殊能力の事だ。普通だったら第二形態セカンド・シフトを経ないと発現しない大変珍しい物だ」

「それが織斑君の I S で発現したんです。しかも一次移行で……」ファースト・シフト

「普通、同じ単一仕様能力ワンオフ・アビリティが発現することは無い。無いのだが……」

「現にこうして起きていますからね。これは上が大慌てになりますね」

今頃、この映像を見ていた I S 学園上層部が有れているだろうと想像した真耶は引きつった笑顔になる。

千冬も悩みの種が増えたと言わんばかりに頭を掻く。

「まあ、I S には操縦者に危機が迫ると自動的に発動する絶対防御が有るが織斑の武装はその絶対防御を発動させる武器だと思え」

「ちなみに絶対防御は発動すると急激にシールドエネルギーが消耗するので戦闘時は途轍もなく驚異です」



「つまり、防御力を無視してそのままの威力を相手に叩き込める武装という事だ」

「でも、それって……」

「ああ、一歩間違えれば相手が死にかねない力だ」

真剣な顔でそう告げた千冬の言葉は一夏に重くのしかかった。  
それは自分が手にした力に恐怖を持っていることが見て取れた。

「………恐ろしくなったか？ その力が」

「ああ………力の使い方を間違えてしまったらって思うと」

「それで良いんだよ」

恐怖に飲まれかけた一夏に断言するマドカ。

一夏だけではなく箒や真耶、そして千冬もマドカに向けて視線を送る。

「恐怖を抱くと言う事はお前がその力がどう言う物かをしっかりと理解していると言う事だ」

「自分の力に恐れを抱かぬ者はその力を振るう資格のない愚か者だ」

「恐怖を持たない者は早死にする。だが、恐れるだけではなくその恐れを恥じろ、そしてその時に感じた屈辱も忘れるな。一欠片の勇氣を持ち続けろ、そうすれば、お前は必ず強くなつて立ち上がれる」

マドカのその言葉を聞いて一夏はハツとしたように顔を上げた。

その顔にはもう恐怖は無く自信が満ち溢れていた。

「ああ、俺は自分の力を恐れるだけじゃない。その時の恐怖と屈辱を力に変えて見せる  
!!」

「ふっ、ああ期待しているぞ。一夏」

「任せろ!!」

それだけ言うとマドカは再び前を向き、アリーナに出撃して行った。  
残された面々は互いに頷いてモニターに注目する。  
彼女の勇姿を自分たちの目に焼き付ける為に。

「……待つて居ましたわ。遂に貴方と戦えるのですね」

「ああ、待たせた。楽しみにしていたぞ、お前と戦えるのを」

「それは私もですわ。貴方の余裕を崩せる時を待つて居ました」

先程とは打って変わって、好戦的な笑みを浮かべているマドカと先程よりも気を引き締めたセシリア。

互いに試合開始のブザーを今か今かと待ちわびている。

「……貴方に対する謝罪は、試合が終わってから直接する事にしますわ」

「ああ、試合前にされては興が冷めてしまう。それは嫌だろう？ お互いに……」

「そうですね。その通りですわ」

その瞬間、試合開始のブザーが鳴り響く。

セシリアはその瞬間にブルー・ティアーズを解き放ち、マドカはその手に1つの刀を呼び出した。

「行きなさい!! ブルー・ティアーズ!! 貴方に相応しき狩るべき相手です!!」

「『起きろ! 浅打!!』あせうち 久し振りに喰い応えが有る相手だ!!」

ブルー・ティアーズが水を得た魚の様に素早く動くがそれよりも速くマドカは一瞬で

セシリアの懐に入り込む

スターライト mark III を盾変わりに構え、マドカの一閃を何とか退けるが勢いを殺せず、セシリアはスターライト mark III を手放してしまう。

勿論、そんな大きすぎる隙を見逃すマドカでは無くそのまま追撃を行う。

「懐に入り込まれてはご自慢のブルー・ティアーズも使えないぞ！ さあ、どうする!？」

「つく！ まだまだあ!!」

鋭い連撃を受けるが何とか受け流したりするが、捌き切れない攻撃によってセシリアのシールドエネルギーがみるみる減っていき、観客の誰もがマドカの勝ちを確信し始めた。

マドカも早々に決着をつける為に更に攻撃の速度を上げようとしたその瞬間、マドカの眼前に閃光が走りISのシールドエネルギーが減り始める

「何!？」

「油断したのはそつちですわ!!」

動揺したマドカの胴に向けてセシリアの渾身の回し蹴りが直撃し、マドカはそのまま吹き飛ばされる。

それに対してブルー・ティアーズが縦横無尽に駆け巡り連続で攻撃を当て始める。

レーザに当たり、マドカのシールドエネルギーもドンドンと減るが体勢を立て直したマドカはブルー・ティアーズからの攻撃を受け流し、切り裂きの確に攻撃を捌いて行く。

「ブルー・ティアーズは確かに単体では脅威だが、慣れてしまえば道と言う事は無い!」  
「でしたら、これなんてどうですか!？」

未だにブルー・ティアーズからの攻撃を捌くマドカに対してセシリアは突撃する。

その行動に観客達やピットに居る面々、そして戦っているマドカですら驚愕した。

スナイパーとしての利点、距離を自分から詰めるという愚行に誰もが理解できていなかった。

ただ一人、セシリアにその戦法を教えた男を除いて。

「受けなさい！　これが私の新しい戦法です!!」

宣言と共にセシリアの両手には小型のサブマシンガンが装備されておりマドカに向けて発砲する。

先程の閃光の正体を理解したマドカはその攻撃を腕だけで防ぐがその背後をブルー・ティアーズで撃ち抜かれる。

「つぐー！　まさか、ここまでやるとは」

「悔りましたわね？　戦いはまだここからですわよー!」

距離を詰め、背後はブルー・ティアーズが狙い前方はサブマシンガンを連射するセシリア。

マドカはブルー・ティアーズを無視し前方のセシリアに向けて浅打を振り下ろす。

それを最小限の行動で回避したセシリアは意趣返しとして裏拳をマドカの顔面に叩き込む。

「ガハア!？」

「おまけです!!」

裏拳を放ち、そのままサブマシンガンを叩き込む。

武術と銃器の扱いを合わせたガンⅡカタに押され始めるマドカ。

再び分からなくなり始めた試合に熱狂の声を上げる観客達。

それはピットにいる一夏達も同じだった。

「スゲエ……二人とも」

「はい、マドカさんの攻撃も捌き方も凄いです」

「慢心を無くし、勝利に貪欲になったオルコットも目覚しい成長だ」

「あ、あの動きは……何なんですか？ 銃火器を撃ちながらの格闘など」



「あれはガンⅡカタという戦闘スタイルだ。今までのアイツだったら絶対に取る筈の無い戦法だ」

「という事は」

「ああ、恐らくだが……親父さんの仕業だろうな」

一夏は苦笑いしながらも嬉しそうな顔をしていた。

それは、自分が幼い頃から知っている雷光の変わらないお人よしさに対してだったが。

「あゝあゝ俺もあそこで戦いたいなあ！」

「お前はもう少し、機体に慣れてからだな。それに時間も無い」

「え？ でもこの後って親父さんの番じゃ？」

「真木さんは辞退したよ。専用機の調整が間に合わなかったそうだ」

「ええ!?! 何で!?!」

「それは本人に聞くといい。少し……いや、かなり怒っていたがな」

「親父さんが怒るって……また身内に何か有ったのかな?」

「それは後で聞け……む?」

千冬はそれだけ言うとモニターに注目するがマドカの様子を見て面白そうに笑う。

それに釣られて一夏や箒、真耶もモニターに目を向けるとマドカの持つている武器が変わっていた。

「あれって?」

「マドカの奴……本気になったぞ」

「どういう事ですか？」

「忘れたか？ マドカはこう言った筈だ。『今のお前だったら武器は一つで充分だ』と」

「それって、つまり……」

「ああ、オルコットを認めたという事だろう」

教室でのマドカの言動を思い出し、千冬のその発言に全員が嬉しそうに頷く。

それはクラスメイトの成長と今後のライバルになる新たな存在の誕生を喜ぶ様だった。

「……ここまでやるとは、予想外だったよ」

仕切り直すかの様に距離を取り浅打を消すマドカ。

その様子を攻めずにじっと見つめ待つセシリア。

お互いに半分を切ったシールドエネルギー、だからこそセシリアは慎重にマドカを見定める。

「一週間前の発言を取り消そう。今のお前は……強い」

「あら、嬉しいですね。ようやく認めて貰えた様ですわ」

「ああ、だからこそ……私も全力を出させてもらおう!!」

両方の腕を前に掲げ、マドカは目を開き大声でその名を呼ぶ!!

「水天逆巻すいてんさかまけ『振花ねじばな』!!」

掲げられたマドカの手に水が渦を巻き伸び、その水で出来た二振りの刀が出現する。

その刀を見たセシリアは何かを感じ取ったのは目を離さない様に再び距離を取る。

が、その瞬間に自身の背中に何か突き刺さった。

「がっ!? な、何が!？」

「目を離したな？」

「はっ!」

背中に意識を向けた瞬間にマドカは両方の腕の腕の刀を振り下ろす。

が、その時の刀身は先程よりも明らかに伸びており回避するにしても範囲が広すぎた。

本能的に下に向けて瞬<sup>イグニッション・ブースト</sup>時加速で避け、マドカに向けてブルー・ティアーズの射撃とサブマシンガンによる射撃を試みるセシリア。

「無駄だ、その攻撃では振花は突破できない」

その宣言と共にマドカの周囲に水で出来たバリアの様な物が出現する。

レーザーがそのバリアに触れた瞬間、マドカのI Sのシールドエネルギーが僅かだが回復しセシリアは目を剥く。

「その水は……エネルギーを吸収するのですか!？」

「吸収できる……が、出力が大きすぎると突破されるのが弱点だな」

「でしたら!!」

ブルー・ティアーズの残存器にマドカに向けて攻撃させるがマドカの周囲にあるバリアを破るには至らない。

それでもめげずに攻撃するセシリアに止めを刺そうとマドカは両手に握った振花を1つに束ねた。

「私に振花を使わせたのだ。それは誇っていい、だから……もう終わりだ」

せめてもの手向けにとマドカは全力で振り下ろす。

その瞬間、セシリアのシールドエネルギーは0になり試合開始のブザーが無情にも鳴り響いた。

【試合終了!! 勝者、織斑マドカ!!】

観客の大歓声を背に二人は向かい合う。

その顔はとても晴れやかで一週間前までいがみ合っていた2人とは思えない物だった。

「完敗ですわね」

「……何を言っている？ 私の予想よりも圧倒的に強くなっていた。むしろ、評価を覆された私の負けの様な物だ」

「ふふっ、お上手ですわね」

「冗談では無いんだがな……」

「……マドカさん、改めて。一週間前での貴方のお父様に対する数々の無礼な物言いと貴方に対する侮辱。謝らせてください」

「……一度だけだ。二度目は本気で叩き潰すぞ？」

「ええ、肝に命じますわ」

「なら良い。さあ、試合は終わったんだ戻るぞ？」

それだけ言うとマドカはさっさと自分のピットの方に帰還して行った。

セシリアもそんなマドカに対して頭を下げて雷光の待っているピットに帰って行った……

—————

「お疲れ、マドカ。凄かったな！ お前の武装」



「あれは中々の物だな。刀身が伸びていたのは一体どんな理屈なんだ？」

「ああ、それは後で教えるから少し休ませてくれ」

マドカは少し不機嫌そうに頬を膨らませてISを解除するとそそくさと控室の方に歩いて行った。

そんな様子に首を傾げる一夏と箒。

千冬だけは何やらニヤニヤと笑っていたため、一夏は質問する。

「なあ、千冬姉。マドカ、なんか不機嫌じゃなかったか？」

「それはな……試合終了前にマドカはオルコットに一杯食わされたんだ」

「どういう事ですか？ 織斑先生？」

「何だ、気が付かなかったのか？ オルコットは振花に斬られる寸前に閉まっていたス

ターライト mark III を展開して最大出力で撃ち抜いたんだ。バリアは突破出来たが威力は落ちていて仕留めきれなかったみたいだがな」

「ええ!!? あの一瞬で!？」

「ああ、最後に一撃を喰らってしまつて悔しかったんだろうな」

「そういう事か……何というか、可愛いな。マドカつて。箒もそう思わないか?」

「ふふつ、ああ。案外、負けず嫌いなんだな。マドカは」

マドカの不機嫌な理由を知り可笑しそうに笑う一夏と箒。

「お疲れ様、セシリア」

「ありがとうございます。お父様」

セシリアの方のピット、そこでは行く時と同じように待っていた雷光とスツキリとした顔をしたセシリアが向かい合っていた。

「強かつただろう？ あの二人は」

「ええ、お父様の言った通りの人達でしたわ」

「そういうセシリアだって、一週間前よりも強くなっていたぞ。あのマドカに武装を使わせたんだからな」

「それ、マドカさんにも言われましたわ」

「おお、やっぱりそうか」

カラカラと笑う雷光と口元に手を当てて微笑むセシリア。  
少し笑うと雷光はセシリアの頭に手を当てて撫でる。

「良くやった……特に最後のマドカに一矢報いたのは素直に凄いと思ったよ」

「……ありがとうございます」

「これからも、精進しよう。俺も、みんなも一緒なんだから」

「はいっ、はいっっ!!」

悔し涙を流すセシリアとそれを慰める雷光。

暫くの間、2人はそうして過ごしていた。

こうして一年一組のクラス代表決定戦は幕を閉じたのだった。

## 取材を受けて彼は自分の決まりを宣言する

「では！ 1年1組のクラス代表は織斑君に決定です!! あつ、1繋がり縁起が良いですね！」

クラス代表決定戦の激闘から次の日、朝のHRで行われた発表に愕然とする一夏。そんな一夏にお構いなしと言わんばかりにやんややんやと騒ぐクラスメイト達。

「あ、あの山田先生。質問良いですか？」

「はい、なんですか？ 織斑君」

「確か俺は負けた筈なんですけど、何故に俺がクラス代表なんですか？」

「それは「私とマドカさんが辞退したからですわ!!」

真耶が説明しようとした時、大きな声を上げてそれを遮ったのはセシリアだった。遮られた真耶は涙目であうあうと情けなく呻いている。

「何で2人と辞退なんて……」

「簡単だ。私は自分の仕事柄、クラスの方までは忙しくて出来ない」

「私も今までの行動を思い返して相応しくないと思ったので辞退したのですわ」

そこで一呼吸置くと、セシリアはその場で教室の全生徒に向けて頭を下げた。

「この度は皆さまの母国、並びに皆様に対する数々の聞くに堪えない侮辱。大変、申し訳ございませんでした」

「セシリーはちゃんと反省したんでしょ？ だったらそれで良いじゃん」

「そうそう、本音の言う通り」

「これからよろしくね、セシリア!!」

本音の一言を皮切りに続々とセシリアに対して温かい言葉がかけられる。

セシリアは目元に涙が貯まり、零れそうになるがそれを拭って再びお辞儀して着席する。

「では、この後の授業だが各々着替えてグラウンドに集合だ」

「それじゃあ、行くぞ一夏」

「ちよ!?! 待ってくれよ、親父さん」

千冬から本日の予定を告げられた雷光はさっさと着替えを持って足早に教室から出ていく。

その後を慌てて追いかける一夏とそれを見送るマドカと箒。セシリアも気になったのか顔を向けていた。

「では、これよりISを使った実践的な飛行訓練を行う。織斑、オルコット、マドカ、試しに飛んでみる」

「え？ あのこと……織斑先生？ 真木さんは」

「……真木は現在、事情が有り専用機を使えない。良いから、さっさと展開しろ!!」

一夏からの質問に苛立つ様に言い放ちISをすぐに展開するように指示を出す千冬。それを受けて慌ててISを展開する一夏とセシリア。マドカは最初の段階で既に展開を終わらせていた。

「展開したな？ では、飛べ!!」

千冬のその一声でまずはマドカが飛び、それに続くようにセシリア、最後に一夏が飛



び立つが千冬は不満なのかマイクに向かって苛立った様に口にする

『何をしている！ スペック上だったらその三機の中で白式が一番だぞ?!』

「そんな事言ったってなあ……ISを付けて空を飛ぶなんてまだ2回ぐらいしか無いの  
にどうやって飛べば良いんだよ」

「一夏さん、説明しても構いませんが反重力翼と流動波干涉の話になりますわよ?」

「難しく考えるな。こんな物は所詮イメージだ。ちなみに私はウルトラマンが空を飛ぶ  
のをイメージしている」

「まさかの特撮?! マドカってそっちも行けるのか!?!」

「簪から薦められて見てみたら面白くてな。お気に入りにはウルトラセブンだ」

「何ですか? そのウルトラマンというのは?」

「セシリア貴様！ ウルトラマンを知らないのか!? 貴様、人生の半分は損をしているぞ!!」

「そ、そこまですの!?!」

「後で私の持っているBlue-rayBOXを貸してやるから見てみる！ 人生観が変わるぞ」

『くだらない事を話していないで集中しろ馬鹿者共!!』

一夏の苦言から始まったアドバイスはいつの間にかマドカによる特撮を熱く薦める場にジョブチェンジしておりそれを見かねた千冬からの怒声を受けて三人は気を取り直して空中で停止する。

「うわあ……千冬姉の怒った顔がこんなに離れてるのにくつきり見えるぞ」

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているんでしてよ」

「えっ!?! これでも!?!」

「当然だ、本来のISは宇宙空間での稼動を想定した物。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握する為にこの程度の距離は見えて当たり前だ」

「ほえ、本当に凄い発明だな。ISって」

「織斑、オルコット、マドカ、順番に急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から10cmだ」

「では、まずは私から行きますわ」

「では次は私だ」

「お、俺が最後かよ」

セシリア、マドカ、一夏の順番に千冬から指示された内容を実行するために並び直す。最後になった一夏は緊張しているがマドカとセシリアはそれを見越して自分達が先になっていた。

「良いか一夏。まずは私達が手本を見せる。お前は落ち着いてやれば出来るからしっかり見ていろ」

「あ、ああ。分かったよ」

「では、お先に失礼します」

その言葉の後、セシリアは凄まじい速度で地面に向けて加速しドンドンと小さくなっていく姿を一夏は真剣に見つめていた。

「10cmジャスト……流石だな」

「お褒めに預かり光栄です」

「では次はマドカだ。やれ」

「了解した」

マドカは少しだけ笑い、セシリアと同じように加速し地面ギリギリでブースターを逆噴射させて着地する。

「同じく10cmジャスト……手を抜くなと言いたいところだが織斑の為か」

「手本を見せなければ出来る物も出来ないからな」

「今回は多めに見よう。では最後に織斑、やれ！」

「お、おう!!」

セシリアとマドカのお手本を思い出しながら一夏は白式のスラスターを全力で吹かす

その瞬間、試合の時と同じくらいの凄まじいスピードで地面に向かってグングンと進む。

「……ハハでー！」

ある程度すすんだ瞬間、一夏はスラスターの逆噴射を想像してシステムに指示を出す  
が、何故かスラスターは更に加速してしまい一夏は地面に物凄いスピードで突撃し、土  
埃を巻き上げてとても大きなクレーターを作ってしまった。

「誰が地面に突撃しろと言った？」

「い、いや違うんだよ！　頭でスラスターに逆噴射をしろって考えてたのに何かス  
ピードが上がっちゃったんだって」

「初歩的なミスだな。試合の時の感覚と見た感じにしようとした結果だな」

「今後の課題だ。取りあえず授業後に織斑はこの穴を埋めておけ」

「俺一人で!？」

「当然だ、それともなにか？ お前の尻拭いに他の生徒の手を煩わせる気か？」

「いえ……謹んで一人でやらせて頂きます」

千冬に睨みつけられ、肩を落として頷く一夏。

雷光はその二人の様子に溜息を吐きながらも苦笑いだった。

「次は武装の展開だ。織斑、雪片式型を出してみろ」

「わ、分かった」

一夏は頭の中で雪片式型を思い浮かべると右手に一瞬で出現する。

その速度を見て千冬は感心するように息を吐くがすぐにいつもの様に指摘する。

「速度も速いな。その調子で精進しろ」

「はい！」

「では次はオルコット。お前の番だ」

「はいっ！」

セシリアは右手を前方に水平に伸ばしスターライトmarkⅢを呼び出す。  
その姿は洗礼されており歴戦の戦士のそれだった。

「以前見た癖は直っているようだな？」

「はい、厳しい指導を受けて治せましたわ」



「それで良い。戦いの場であのような姿をさらせば一瞬で勝負をつけられるからな。最後にマドカ」

「これで良いか？」

マドカは千冬に名前を呼ばれた瞬間には既に浅打と振花の両方を左右の手に展開を終えていた。

その速度に一夏を始めとしたクラスメイト達はざわつく。

「……まだ展開しろとは言って居ないんだが？」

「今回の授業は速度を見せる物だと思っていたんだが？」

「私が指示してからにしろ……何時まで騒いでいる！ 熟練者だったら普通の速度だ！ お前達もこれくらいの速度を目指せ!!」

マドカの発言に頭が痛いのか手で頭を抑え注意を促し、今だに騒ぐ生徒達は千冬の一



「ああ、失敗した。初っ端から幸先悪いなあ」

「何言ってるんだ。失敗したからこそ今度からは同じ轍は踏まないだろう？」

「そうだけどさあ、親父さん。あの穴を埋めるって……って、親父さん!？」

「何驚いてんだよ？ あんな穴を埋める作業を一人でやらせる訳ねえだろう？」

「全くですわ。私達、そんなに白状に見えます？」

「一夏め、幼馴染を放って戻る訳が無いだろうに……」

「その鈍感さだけは真似できんな」

「箒にセシリア、マドカまで……」

いつの間にか雷光の横にはセシリア、箒、マドカの3人も集まっておりその全員が一

夏を手伝う気満々と言った様子でスコップを挿んでいた。

そのまま全員で一夏の開けた穴を埋め始めるが暫くして箒は少し遠慮気味に口を開く。

「ああくえつと、一夏？ 勘違いをして欲しくないから言つて置くが別にクラスメイトの奴等が白状という訳じゃ無いんだぞ？」

「分かつてるよ。皆だつて忙しいんだろ？」

「ああ、彼女たちは彼女達で色々と準備が有るからな」

「準備？ 一体何の？」

「それは……」

「ストップですわ、箒さん。そしてお父様。それはまだシークレットです」

「おっと、すまんな」

一夏が首を傾げてした質問に思わず答えようとした雷光をセシリアが止めて申し訳なさそうに頭を下げる。

その二人の様子に箒は呆れたように首を振り、マドカは呆れたように手を頭に当てて溜息を吐く。

「気にするな。それよりも今はこの大穴を埋める事に集中しろ。このままだと日が暮れる」

「あ、ああ！ 分かった!!」

「久しぶりに本気でやるか。すぐに終わるぞ」

「親父さん、もういい歳なんだからあんまりやり過ぎないでくれよ?」

「おいおい、俺はまだまだ若いぞ?」



部屋で穴埋めの疲れを癒していた一夏は本音に呼ばれ、同じ部屋に居た箒に引つ張られるがままに食堂へとやってくる。そこにはデカデカと「織斑一夏 クラス代表決定 おめでとう!!」と書かれており、そこには先程分かれた雷光やマドカ、そして他クラスの生徒達もいた。

「いや、これで今年のクラス対抗戦も話題が尽きないよねえ！ 同じクラスに男子がいてよかった！」

「うんうん、2人もクラスに男性が居るんだよ？ しかも片方はイケメンでもう片方はダンディなおじ様だし!!」

「つく、羨ましい！ 私達のクラスにも男性がいて欲しい」

「あはは、みんな元気だな……」

「人気者じゃないか、一夏」

「本当にそう見えるか？ どつちかかっていうと面白がられているだけだろコレ。てか、マドカはニヤニヤ笑ってんなよ。てか親父さんはいつの間にか何食ってんの!!」

「いや、腹が減ったからさ。お前も食うか？」

箒が少しだけ不機嫌そうに言うのと一夏は頭を抱えながら反論し、遠くから自分を見てニヤニヤと笑っていたマドカに対して口を尖らせる。

そんな生徒達の様子を見て、笑みを浮かべる雷光は食堂のおばちゃんに注文して蕎麦を啜っていた。

「はいはい新聞部でくす!! 話題の新生入、織斑一夏君と織斑マドカさん、そして激闘を繰り広げたセシリア・オルコツトさんと未だに謎が多い真木雷光さんに特別インタビューをしてみましたー!」

とそこでハイテンションな様子で食堂に入って来た女生徒を見て本音は心当たりがあったのか手を振りながらその女生徒に声をかける。



「まゆまゆだくどうしたの？」

「やあやあ、本音ちゃん。今日は新聞部としてだからまた後でね？」

「あの、どちら様ですか？」

「ああ、ごめんなさい。私、こう言う物です」

女生徒は胸ポケットから3枚の名刺を取り出すと一夏とマドカ、そして雷光に一枚ずつ手渡ししていく。

雷光はその仕草が社会人と同じようにしつかりとした物に感心していた。

「I S 学園新聞部の薫子かおるこです。早速ですが取材してもよろしいでしょうか？」

「アポイント無しで突然だな」

「そこに関しては大変申し訳ございません」

マドカからの鋭いツツコミを受けた薫子は即座に頭を下げて謝罪する。

その薫子の行動に逆に面食らったマドカが少し慌てて頭を上げる様に言っただけの空気が持ち直る。

「気を取り直して……まずは一組の代表になった織斑一夏君！」

「は、はい!？」

「クラス代表になった意気込みをどうぞ!!」

「えっと……みんなの期待に答えられる様に精進します」

「おおく思っていたよりも良い返事だね！ これだったらこのまま乗っけても大丈夫そう……」

一夏の発言をボイスレコーダーに録音し、確認を終えると今度はメモ帳を手にセシリアに向き直る。

「では今度はクラス代表決定戦で織斑君と激闘を繰り広げたセシリア・オルコツトさん！」

「私もですか？」

「はい！ 入学前よりも格段に強くなっていった様子でしたし、あの戦い方は誰に教わったのか気になっている子達が結構いるみたいなので」

「そうですね……強くなったのは肩肘を張らない様にしたからで、戦い方はお父様……雷光さんに鍛えて貰ったからですわ」

「お父様？」

「はい、お父様ですわ」

セシリアの突然のお父様発言にキョトンとなる薫子とクラスメイト達だったがマドカと雷光、一夏と箒の4人の反応は違っていた。

一夏と箒とマドカは「あくあ、言っちゃった」と言った風に苦笑いを、雷光は手で目を覆って天に向かって顔を上げた。

「あ、愛称！ 愛称だよね！ 雷光さんって面倒見が良いってたっちゃんが言ってたし！」

「愛称？ まあ、そうですね」

「というか、たっちゃんって……」

「更識楯無だな？」

「誰だそれ？」

この場で初めて聞いた人物名に思わず首を傾げる一夏とそんな一夏に対して溜息を吐く筈。

彼女は一夏の肩に手を当てると優しく声をかける。

「一夏……入学式で先生が言っただろう？ 生徒会長の名前だ」

「そうそう、この学園の生徒会長ね。彼女は私の友達なんだ」

「ほお？ あの楯無の友達か」

「あれ？ マドカさんはたっちゃんのことを知ってるの？」

マドカの口ぶりから薫子は楯無の事を知っている事が何となく気になって質問を試みることにした。

「知っているも何も彼女とは知り合い……いや、友達だな。簪ともそうだし」

「そうそうくまくちゃんはかんちゃんともお嬢様との友達なんだく」

「そうだったんだ！ これは良い情報が手に入った!!」

思わぬ収穫だと薫子は満面の笑みでメモ帳に書き、そこで一度深呼吸して再びマドカに向き直る。

「さて……それじゃあマドカさん。貴方にも質問するけど良い？」

「構わない、それで？ 何を聞きたいんだ？」

「えっと、風の噂でマドカさんは極道の一員らしいって聞いたんだけど本当？」

「ああ、間違いない。私は真木組の一員だ」

「真木組って言う……真木さんの？」

「そうだ。あそこで刺身を食ってる親父殿は会長だ」

マドカが指を刺した先には嬉しそうに注文した刺身を食べている雷光の姿が有り、その目の前には積み上げられた幾つもの皿が置いてあった。

その塔の様に積み上げられた皿の数に思わず顔が引きつる薫子。

「す、凄い食べるんですね。真木さんって……」

「あれは珍しいぞ。普段はもつと少ない」

「え？　じゃあ何で……」

「大方、日本政府に対する怒りとかストレスが有るからああやって一杯食べてそれを発散しているんだろう」

「成程、真木さんのストレス発散は食すことと……メモメモ」

「で？ ほかに質問は有るのか？」

「あつ、後は普段の学校生活とか趣味についてかな？」

「学校生活について？ そうだな」

マドカは顎に手を当ててしばらく考える仕草をして、頷き口を開く。  
そこには少しだけ微笑みが乗っていた。

「楽しいよ。今までの人生の中で一番と言える程に、な」

「ほおほお！ それで、趣味の方は何か有る？」

「趣味は……特撮鑑賞だな。これは簪に教えて貰ったんだが特撮はとても面白いな」

「特撮が好きなんだ？ 一番好きな特撮は何？」



「勿論！ ウルトラマンだ!!」

今まで見た事が無いほどに目をキラキラと輝かせて力強くそう宣言するマドカは普段の大人びた感じではなく年相応の子供の様でとても可愛らしかった。

「そっか、うん！ 良い記事が書けそう!!」

「それは良かったよ。ほら、親父殿。いつまでも食べていないでこっちで質問を受けてくれ」

「ん？ 俺も?」

最後の一切れを完食し口を拭いていた雷光はマドカからのご指名を受けて少し意外そうに自身を指さすと薰子もうんうんと頷く。

「はい、残るは真木さんだけになったのでお願いします」

「俺なんか質問ある？」

「有りまくりですよ！」

「そうか……じゃあ少し待っていてくれ」

雷光は食器を片づけて、食堂のおばちゃんに感謝を告げると薫子の対面に有る椅子に座り真つすぐ相手の顔を見つめる。

「では、質問です。なぜI S学園に来ようと決めたんですか？」

「日本政府に五月蠅い位に頼まれたつてのも有るが最終的な決め手は一夏だ。アイツは子供の頃から面倒を見てて心配だったからつてのも理由だな」

「織斑君とも交流が有ったんですか？」

「初めは束と千冬の奴等とちよつとした事で知り合つてそれから今までずっと交流があ

る」

「ああ、だからと言って一夏が極道関係者かと聞かれれば絶対に無いって言えるぞ」

「では、どのような関係ですか？」

念の為にと言った感じにやんわりとそう口にする雷光と一言一句を聞き逃さない様にとメモを取っていた薫子は一旦、メモを取るのを止めて真剣な様子で雷光に質問する。

その質問を受けて雷光は少し考えると笑みを浮かべて答える。

「アイツはどっちかっていうと……そうだな、裏の世界じゃない表の世界での家族かな」

「家族ですか？」

「ああ、アイツが小さい時からずっと面倒見てたからある意味で親みたいなものだと俺は勝手に思ってるよ」

「……なんか、良いですね。そう言える関係は」

「そうか？ まあ、君みたいな誠実そうな子が言うんだったらそうなんだろう」

「ありがとうございます／＼で、では最後にこの記事を読む人達に何か一言をお願いしますー」

「一言か……」

雷光はそこで一度、姿勢を正して真剣な顔になって薫子に向き直る。

「知つての通り、俺は極道だ。危ない奴だと思つたら近づかない事を薦める。」

「だが、もし君達が俺の身内に対して敵対行為をしなければ俺からは何もしない。それは約束する」

「そして、もし俺の身内に何か危険が迫れば俺は全身全霊をかけてその脅威を打ち砕く。それを知っていてくれ」

「まあ、何が良かったかって言う……取り上えず俺の所の奴に手を出したら許さねえから」

少しだけ、ほんの少しだけ気迫が漏れその場の全員に重圧が降り注いだ。だがそれも一瞬だけですぐに消え失せた。

薫子はそこに王の姿を確かに見た。彼女は深々と頭を下げて感謝の意を告げる。

「本日はありがとうございます。大変有意義な時間でした」

「俺もだよ……ああ、それと」

それだけ言うと雷光は薫子の耳元で小声で囁くと彼女は目を見開いて驚く。

薫子の反応を見て、楽しそうに笑う雷光はそのまま一夏と箒、マドカとセシリアを呼ぶ

「どうしたんだ、親父さん？」

「お父様、何か有りましたか？」

「また酒が飲みたくなつたんですか？　飲み過ぎは駄目だと何度も言った筈ですが

……」

「そもそもI S学園でお酒が飲めるのか？」

「最後だから、写真を撮って貰おう。記事に必要なだからな」

「え？　あつ、はい！　良いですか？」

少しボーっとしていた薫子は雷光のその言葉で我に返つてその場の面々に頭を下げ  
てお願いする。

それを受けてその場の全員が了承して写真を撮影した。

余談だが、その写真は一瞬にして察知した1組の全員が映り込んでいて大変賑やかな写真に変貌を遂げていたそうなの

「ふうん？　ここがIS学園かあ」

一夏達が代表就任祝いパーティーを行っているのと同時刻、IS学園の入り口には一つのスポーツバックを持った小柄の少女の姿が有った。

その活発そうな少女は手に持った紙を片手に事務室に向けて歩き出す。

「待って居なさいよ、一夏……!!」

彼女の到来がIS学園に新たな風が吹くことになる……

# 中華娘と生徒会長の襲来を受けて男は笑う

「親父さん、マドカもおはよう！」

「二人とも、おはようございます」

「おう、箒に一夏。おはよう」

「おはよう、二人とも」

一夏のクラス代表決定パーティーから次の日の朝、食堂で食事を終えて教室に向かう廊下で雷光とマドカを発見した一夏と箒は挨拶をして二人の元に向かう。

それに気が付いた雷光とマドカも足を止めて二人と合流すると再び教室に向けて歩き出した。

「昨日は楽しかったか？ 一夏」



「いやいや、緊張してあんまり楽しめなかったよ。親父さん」

「情けないぞ、一夏。今後はああいう機会も増えるのだ。今のうちに慣れておけ」

「マドカの言う通りだ。クラスの代表なのだからどつしりと構えていれば良いんだ」

「マドカも箒も辛辣じゃないか？」

箒とマドカにバツサリと切り捨てられ、肩を落としてしまう一夏。

その様子を見て苦笑いする雷光は教室が普段に比べてざわついている事に気が付いた。

「みんな、おはよう」

「あら、お父様！ それに一夏さん、箒さん、マドカさんもおはようございます」

「おはよう、セシリア。それで皆どうしたんだ？ 廊下からでも聞こえるくらいざわついていたけど……」

「何か緊急事態か？」

「なんでも転校生がやってくるそうですわ」

「転校生？ こんな時期にか？」

一夏は転校生と聞いて首を傾げ、雷光とマドカと箒は少し顔を険しくして転校生に対する自分達の考えをそれぞれ口にする。

「普通の学校だったら親の転勤とかもあり得るがI S学園で転校生となると……」

「確かに、どうもキナ臭いな」

「どうせ、国家からの命令で編入して来たって感じだろうな」

「いやいや、流石にそれは無いだろ……」

「全くお前は……少しは自分が置かれている状況を思い出せ」

一夏の考えすぎではと言わんばかりのツツコミに呆れた様子のマドカは一夏の頭を軽く小突き雷光は自分の席に向かっていく。

「あつ、織斑君!! 頑張つてよ?」

「頑張るって何を?」

「もう、忘れてる? あと少いでクラス対抗戦じゃん」

「勝つたら食堂のデザートフリーパスが手に入るんだよお」

「へー学校行事なのにそんな景品ついてんの?」

「そうだよ。だからみんなメラメラ燃え上ってるんだよ」

聞かされていなかったクラス対抗戦の景品について驚く一夏を他所にクラスメイト達は今の段階で既に勝ったと思っっているのかどんなデザートを頼むかという内容に話が変わっていた。

「あの練習試合を見た感じだと織斑君だったら優勝間違いなしだよ」

「それに今の所専用機を持っているクラス代表って1組を除くと4組だけだから余裕だよ」

「——その情報、古いよ」

突然聞こえたその声を聴いて教室の会話はピタリと止み、全員が声の聞こえた方を見ているとそこには腕を組みドアにもたれ掛かって片方の目を閉じた一人の少女が居た。

「2組も専用気持ちでクラス代表に変わったの。そう簡単に勝てるとは思わないでね？」

「鈴？ お前、鈴か!？」

「ええ、そうよ。中国代表候補生、ファンリンイン鳳鈴音よ。今日は貴方達に対して宣戦布告しに来たわ」

鈴と名乗ったその少女はそう言うのと1組の面々を見渡しニカツと歯を見せながら不敵に笑って見せる。

その堂々とした姿に宣戦布告しに来たと言われた1組の生徒達はただ呆気に取られているだけだった。

「何やってんだよ、お前。全然似合って無いぞ」

「んな!？」

「全くだ、せめてもう少し背丈が有れば様になっていたんだがな……」

「そつちの奴！ 五月蠅いわね、人が気にし……てる……」

一夏に続いてそう零した人物に憤怒の表情で噛みついた鈴だったがその人物の顔を見て、先程の怒りの勢いが急激に無くなって行つた。

鈴の目の前には彼女の最も苦手とする人物である、織斑千冬と全く同じ顔をした人物が立っていたのだ。

「急に黙り込んでどうしたんだ？」

「ち、ちち、ちちちち千冬さん!! な、なななな何でIS学園の制服着てるの!?!」

「……はあ、私は織斑先生の親戚の織斑マドカだ」

「え？ 千冬さんの親戚？ ……なあんだ。そうだったのね。改めて、中国代表候補生の鈴よ」

なぜ鈴が固まってしまったのか理解したマドカは少しだけ不機嫌そうに息を吐き、冬の様に眉間に皺を寄せながら鈴に自己紹介をする。

マドカの自己紹介を受けてようやく理解したのか鈴も気を取り直してマドカに向き直って手を差し握手する。

「それで、何しに来たんだよ。鈴」

「さっきも言ったじゃない。クラス対抗戦の宣戦布告よ。2組代表としてアンタに対してね」

「俺に? ……つまり久し振りに会いに来たって感じか」

「何でそうなるのよ!? ……そりゃ確かに久しぶりに会いたいとは思っていたけど」

一夏の発言に思わず顔を赤らめて否定する鈴だったが発言の公判で本音が少しだけ漏れていた事に一夏以外が気が付いた。

そんな鈴の様子を見て、自身のライバルになると直感で悟った筈は少しだけ視線が鋭くなり、マドカはまた一夏の被害者の出現に思わず頭が痛くなったのか頭に手を当てていた。

「あつ、でもよ鈴。俺に挨拶するのも良いけど、あの人にもちやんと挨拶しろよ？ 俺達、凄いい世話になってたんだから」

「あの人？ あの人って誰よ……私達の共通の知り合いでI S学園に来てる人なんて居たっけ？」

「いやいや、あそこに座ってるじゃん」

一夏はそう言って雷光の座っている方を指さし、鈴もその示す方を釣られて見てみるとそこに座っていた姿を見て動きが完璧に止まった。

まるで石化したのではないかと思えるくらいにビシリと止まった。

「ん？ どうした鈴？」



「完璧に固まったな」

「アニメみたいに止まったね〜」

「パントマイマーみたいに綺麗に止まりましたね」

「おい、大丈夫か？」

「さっきからどうかしたのか？」

雷光がその騒ぎを聞きつけ一夏達の元に歩み寄って来るのと同時にさっきまで石化していたのが嘘の様に物凄い速さで雷光に突撃する鈴。

「つとお。何だ何だ？」

「お、おじさん!?! 雷光おじさんですよね!?!」

「お前は……鈴か？ 久し振りじゃないか！」

「はい！ お久しぶりです!! でも何で雷光おじさんがIS学園に!?!」

「知らなかったのか？ 俺も一応はISを動かしていたんだよ」

「ええ!? だってそんな情報は一切流れてなかったじゃ無いですか!?!」

「いやいや、だってさ俺の仕事柄とか大っぴらには発表できないからな？ それに国家としても莫大な利益を出すよりも俺をあまり怒らせる様な真似をしたくはないようだ」

「へー流石はおじさんね！」

「おっと、鈴。そろそろ戻らないと不味いぞ」

「ええ、何で？」

「ここの担任は千冬だ」

「すぐに戻ります！」

1組の担任を教えられた鈴はすぐに教室から逃げる様に出て行った。  
そのあまりの速さに一夏達もポカンとした表情で見送っていた。

「あつ、お昼休みにまた来るから！ 逃げるんじゃないわよ、一夏!!」

「え？ あ、おう」

再び教室に出戻りしてそう宣言した鈴は今度こそ2組に帰って行った。

この一連の行動に最早苦笑いしか浮かべられなかった1組の面々はチャイムの音を聞き、千冬が来る前に席に着いたのだった。

午前中の授業が終わり一夏、箒、セシリア、マドカ、本音、雷光は食堂に向かって歩いていると前方から簪が歩いてきた。

「おつ、簪か」

「何だ、更識か」

「何だなんて酷いよ、マドカ」

「かんちゃんも食堂？」

「うん、みんなも？」

「ああ、そうなんだよ。簪さんも一緒にどうだ？」

「ありがとう。ご一緒させてもらうね」

「うむ、簪なら歓迎だ」

「ええ、みんなで食事した方が楽しそうですね」

「決まりだな。それじゃあ行くか」

雷光達に簪が合流して再び歩き始めた一行は食堂の前の曲がり角に差し掛かった。

その時、反射的に動いたのはマドカと簪。そして雷光だった

曲がり角から伸びた拳を雷光が流れる様に受け流し、返す刀でマドカが襲撃者の右側を、簪が襲撃者の左側をそれぞれ抑え込み反撃が出来ない様に抑え込み、止めと言わんばかりに手刀を振り襲撃者の喉元にピタリと止める雷光。

三人のその動きに遅れるようにセシリアと箒、そして一夏も普段持っている獲物を構えようとしたが雷光達は完璧に封殺した襲撃者の顔を見て溜息をついてさつさと拘束を解いてしまう。

「全く、突然の殺気を感じて誰かと思えば……」

「相変わらず悪趣味な……」

「悪戯にしてもやり過ぎだよ」

「かんちゃんの言う通りですよ、お嬢様」

「ふふっ、ごめんなさいね？ 久し振りに貴方達に会えるから少しだけ悪戯したくなっちゃった」

「そう言えば簪とは何度か会ったが貴様とはあまり会わなかったな」

「仕方ないでしょ？ これでも一応は当主だからね」

「今の感じだと少しは真面目に仕事はしているんだな。お前」

「それはどういう意味かな？ マドカ」

「言葉通りに決まってるだろう？」

「あ、あの〜」

「ん？」

雷光達が話している中でおずおずと手を上げる一夏。

一夏達の顔にはこの人物は誰？と書かれている様だった。

そこでようやく雷光達は目の前の少女の事を紹介していなかった事を思い出した

「一夏、箒、セシリア。紹介するよ、彼女は更識楯無だ」

「更識……と言う事は」

「ふふつ、察しが良いわね。そう、私こそは簪ちゃんのお姉さんよ」

「そしてこの学校の生徒会長でも有るんだよ」

「「せ、生徒会長!?!」」

本音からの衝撃カミングアウトを受け、入学式時には顔を見ることが出来なかった意外な人物の登場に一夏達が驚きの声を上げる。

その反応に対し、物凄く嬉しそうにうんうんと頷いて手に持っていた扇子をバツと開く楯無。

扇子には「生徒会長」と達筆な字が書かれていた。

「その扇子、何時も思うがどんな理屈なんだ？ 毎回毎回、違う文字が書いてあるよな？」

「それがお嬢様、誰にも教えてくれないんだよ。私も気になってるから調べてるんだけどねえ」



「私も……あればっかりは教えてくれない」

「あまり言いたくないが……1つ欲しい」

「古いのだっただら有るけど欲しい？」

「欲しい!!」

「」「」「食い気味に言った!」「」「」

楯無の提案に物凄い速さで回答したマドカに箒、一夏、セシリア、本音、簪が思わずツッコむ。

マドカのその反応に口元を扇子で隠して笑う楯無と笑みを隠そうともしない雷光。

「それじゃあ、みんな。またね」

「お姉ちゃんは食堂に行かないの？」

「行きたいんだけどね……そろそろ行かないと」

「その様子だと……お前、まさか」

「それじゃあね！」

マドカのジト目を躲して楯無はそそくさとその場から立ち去っていく。

突然いなくなつた楯無の見送つた一夏、箒、セシリアは呑気に手を振っていたが楯無の事を良く知っているメンバー達は溜息を吐いたり、苦笑いしていたり、頭に手を当てたりしている。

「アイツ……まさかな？」

「そのまさかだと思うよ……」

「お嬢様、お姉ちゃんが怒ってるよ。絶対に」

「なあ、親父さん。結局あの人の用事って何だったんだ？」

「一夏、気にするな。アイツがこうやって場をひっかき回すのはいつもの事だからな」

「それにあの感じだと仕事を……」

一夏達の疑問に少し疲れた様にマドカが、そして少しだけ目を細めて楯無が走って行った方を見つめる雷光。その瞳の眼光は少しだけ怒っている様に見えた。

「それよりも急ごう。食べなければ授業中に頭が回らなくなってしまう」

「あ、ああ！ 急ぐか」

「待っていたわよ！ 一夏、おじさん!!」

「鈴、取りあえず席で待つてくれ」

「食券機の前に仁王立ちされてると注文出来な」

「うっ……ごめんなさい」

雷光とマドカに指摘されてシユンとした顔になってすぐごと席の方に歩いて行く鈴。

哀愁漂うその様子を見て居た堪れなくなつてすぐに注文した品を受け取り、鈴が確保していた大人数で座れるテーブルに向かう一行。

「じゃあ、改めて……久しぶりね！ 一夏、おじさん!!」

「ああ、確か1年振りだったか？」

「鈴のお父さんの仕事の都合で中国に帰つちまつたんだもんな。二人は元気か？」

「はい！ おじさんが相談に乗ってくれたから喧嘩ばかりしてたあの時よりも凄く仲良くなってますよ！」

「そうか……久しぶりに思いつきり叱りつけたから少しだけ不安だったが、良かったよ」

満面の笑みで近況報告する鈴とその報告を聞いて微笑む雷光。

その様子はさながら、久しぶりに会った親戚の子の話を聞くおじいさんだった。

「雷光さん。そろそろ紹介してください」

「そうですわ！ お父様!! いつまでも蚊帳の外は寂しいです!!」

「おりむくも知り合いみたいだけどんな関係〜？」

「何となく察しては居るがな……」

「うん、多分アレだよね」

2人の様子に少し面白くなさそうにへそを曲げた子供のような言い方で箒とセシリアが問い、本音が普段と変わらない様子で、マドカと簪は何となく察した様子で聞いている。

「ああ、すまん。箒、彼女は箒が離れた後に中国から引越して来た凰鈴音だ」

「箒はファースト幼馴染だとしたら、鈴はセカンド幼馴染って奴だな」

「わ、私が離れた後の……」

「ふうん、アンタが一夏やおじさんが良く話していた箒って子なのね？」

「あ、ああ。篠ノ之箒だ。よろしく頼む」

「凰鈴音よ。よろしくね? ……負けないから」ボソツ

箒から差し出された手を握って握手した鈴は他の面々には聞こえない様に宣戦布告し、箒もその布告を受けて先程とは違う意味で目を細める。

「では、次は私ですわね。私はイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですわ」

「日本の代表候補生の更識簪。雷光さんとは子供の頃からの付き合い」

「私はかんちゃんの侍女をしてる布仏本音だよ」

箒の挨拶が終わるのを確認して残っている面々が自己紹介をする。

鈴はそんな面々の一瞥すると箒と同じように握手して頭を下げる。

「イギリスと日本の代表候補生か……」

「はい、鈴さんも代表候補生ですわよね？」

「あくそうなんだけど、私はあんまりそういう拘り無いのよねえ」

「意外……代表候補生はみんななろうとする位なのに」

「私の場合は、ただただ我武者羅に頑張っていたらいつの間になつていたのよ」

「凄いね〜ちなみにI Sに乗って何年目なの？」

「確か……1年だったかしら」

「「「1、1年で!」」」

本音の何気ない一言に対する返事は一夏の予想をはるかに超えとんでもない内容だった。

鈴は何でもないと言わんばかりだが、その厳しさを知る代表候補生2人とその従者、そして実際に戦った事のある一夏と箒は目を見開き驚く。

そんな一夏達とは対照的に対して驚いていないのは雷光とマドカだけだった。



「成程……麒麟児と称されるだけの腕は有るようだな」

「いや、マドカ。何でそんなに冷静なんだよ」

「驚くような内容じゃないからな。世界にはこういう奴等がごまんといるからな」

「そ、そういう物か？」

「そういう物さ。……で、当の本人は何でそんなに私に熱い視線を向けている？」

「え!?! あつ、いや、べ、別に……」

「言いたいことはハッキリと言え。気になるだろう」

「え、えつと……じゃ、じゃあ」

鈴は意を決した様に頷くと真剣な目でマドカを見る。

マドカの方は何となく鈴のしたいであろう質問を予想して心の中で溜息をついた。

「マドカって……おじさんの何なの？」

「……………は？」

予想していた物とは全く違う質問をされて思わず目が点になってしまふマドカとそんな普段は見れないような珍しい光景を見た簪は眼鏡型ディスプレイでバレない様に消音モードで高速撮影し、本音は携帯のカメラで撮影を決行した。

「な、なによ……そんな驚いた顔して」

「あ、す、すまん。予想していた質問と違っていたからな。で、質問の答えだが……私も親父殿と同じ真木組の1人だ」

「アンタも!? じゃあ、カイおじさんとかとも顔見知り？」

「カイさんか。あの人には良く世話になっていたよ」

「懐かしいな。よく弾達も連れておじさんの家に行った時に色々して貰ったなあ」

「私も姉さんと一緒に会いに行って居たな」

「わたしはくかんちゃん達と一緒にいったらお菓子とか一杯貰ったよ」

「カイは何だかんだで子供が好きだからな。お前達をついつい甘やかしてしまうって  
言って居たぞ」

「そうなんですのね……私もお会いしてみたい物ですわ」

「だったら夏休みとかに一回来てみるか？俺も顔を出しに行かないといけないから  
な」

「お父様!! その時は是非!!」

「お、俺もお願ひします! 久し振りに真木組のみんなに会いたいです!!」

「私も私も!!」

「わ、私も良いでしょうか?」

「はいはい! かんちゃんと私も行きたいです!」

「ほ、本音! もう……」

「お前ら……一応、極道の家だつて忘れるなよ?」

「まあまあ、良いじゃないか。マドカ」

呆れたように言うマドカに嬉しそうにはしゃぐ一夏達を微笑ましく眺める雷光。

その様子はまさしく子供を見守る大人の視線だった。

「あつ、そうだ。ねえ一夏、アンター1組の代表なんでしょ？」

「ん？ ああ、一応そうだった」

「だったら今度のクラス代表対抗戦にアンタが出張って来るんでしょ？」

「そうなるな。……確か2組は鈴で4組の代表は簪さんだったよな？」

「簪で良い……もしぶつかったら負けない」

「ふふん、あんた達のどっちとぶつかっても私が全力で叩きのめすけど恨まないでね？」

「面白い事を言うね、鈴……」

挑発する様な物言いの鈴に対して少しだけ目を細めて笑う簪。

その様子を見て口元をニヤリとさせるマドカと鈴。  
こう見えても簪は結構な負けず嫌いなのだ。

「当日が楽しみね？ 2人とも……」

「絶対に負けないから」

「俺だって負けねえから」

「青春してんなあ……」

「親父殿、爺さんみたいな事言ってるぞ」

「こうして少し騒がしい位にお昼は過ぎて行った……」